
光射す方へ・・・【東方小説】

御音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光射す方へ・・・【東方小説】

【Nコード】

N1976BA

【作者名】

御音

【あらすじ】

一期一会を大切にする大学生、田口啓祐。
人との出会いは時に華麗、時に残酷。
その人の人生を大きく変えることもある。
共に辛い思いをし、共に惹かれ合う。
全ての始まりは出会い、今ここに人生の始まりが訪れる。

第一話 「二期一会」

人との出会いは一期一会。

あなたと出会えたのも奇跡かもしれない、実は運命だったのかもしれない。

ただ、これだけは言える。

”あなたと出会えて本当に良かった”と・・・

カーテンから差し込む光、部屋中に鳴り響くアラームの音。

小鳥の囀り・・・は流石に無いか・・・

俺は寝不足で疲れ切った体をゆっくりと起こす。

誰もいない殺風景な部屋、真ん中に机がポツリと置かれている。

このアパートには部屋が3つあり、リビング兼寝室と物置、そして空き部屋にしている。

ブー、ブー・・・

机に置いてある携帯が鳴り響く。

俺は背中に思い岩でも背負っているかのような速度で携帯を手にとった。

二つ折りの携帯を開き、その画面に表示されている項目に目をやる。

”おはよう諸君！本日も朝から晴天で気持ちが良いな！

今日は特別講義があるらしく、各自筆記用具とメモを取れる物を用意することだそうだ！

ということだ俺は支度をしなければな。また大学で会おう！”

見るなり神速の如く携帯を閉じる。

相変わらずのテンションはメールにまで及んでいるらしい。

そう思いつつもこういうお知らせには感謝している。俺は普段からメモを取らないからな。

ベッドから降り洗面所へ向かう。

青色の歯ブラシを手に取り歯を磨く。

当たり前のことだがそれでいい。

「・・・・・・・・眠い」

歯を磨き終え俺はポツリと呟く。

言ったところで眠気が覚めるわけではないのだが、寒いときに寒いと言ってしまうようなものだ。

寝癖をドライヤーで整え、今日着ていく服をタンスからあさる。

「これは昨日と似てるし・・・・・・・・これは、んー・・・・・・・・」

大したセンスも無いのに悩みに悩む。

結局選んだのは無難な感じのだった。

それを急いで着込み、大学へ持っていく物をカバンに入れ始める。朝ご飯は食べない・・・そもそも食べている時間が残されていない。支度を済ませ、玄関に放りっぱなしの靴を急いで履く。

「・・・・・・・・行ってきます」

電車を乗り継いで大学前に到着する。

朝の通勤、通学ラッシュ時ほど電車が地獄に思えることはないだろう。

服のシワを軽く伸ばしながら大学へ歩く。

見知った顔もあれば見知らぬ顔もある。

当然だろう、今はまだ5月。

一か月で新入生全員の顔を覚えれるほど俺には記憶力は無い。

「あの子は○であの子は△。あんこは・・・って、あんこってなんだ？」

隣でぶつぶつと呟く馬鹿は無視するのが一番だと知っている。

俺は大学の方を向きながら静かに足を進める。

「俺の心は真っ黒なのに空は青い・・・その清々しさを少しは分けてくれよ・・・」

「なら分けてあげよっか？」

後ろからひょっこりと声をかけられる。

河野美佐子、中学までと大学からの同級生だ。

未だに後ろでブツブツ呟いている馬鹿と3人でよく遊ぶ仲間だ。

「今日も馬鹿は平常運転なの？」

見ての通りだとジェスチャーで示す。

ただ指で指すだけで分かってくれるほど日常的な風景と化したのだろう。

馬鹿は放っておき、俺は美佐子と2人で大学へ向かうことにした。

こうして誰かと共にいるということは良いものだ。

1人ほど辛くて孤独なものはないからな・・・

「ほら、また暗い顔してる」

美佐子に言われて自ら頬を抓ってみる。

確かに暗い顔をしていたのかもしれない・・・でも仕方がないことなんだ。

俺は深く深呼吸をし、ふっと体に入れた。

「うん、それでこそ啓祐だね！やっぱりしゃっきしてる方が良いと思うよ」

こうして話せる相手がいることに感謝したい。

俺の座右の目は一期一会。人との出会い、関わりは一瞬たりとも大事にしようと心がけている。

「もうすぐ着くよ！先行ってるね！」

そう言って走っていく美佐子。

俺はその後ろ姿をボーと眺めつつ、トボトボと大学へ歩み始める。

この大学に入学して早2年が経つ。

最初こそ不安で押し潰されそうだったが、今の生活を送れているのは美佐子と慶一のおかげと言っても過言では無い。

人との出会いは大切、そして出会えた人に感謝。

俺は少しだけ顔を上げ、大学の門をくぐった。

○

ここは日の光が届かない地底。
地上から深く深く、まるで避けられる、避けているかのようにできた街。

地底の繁華街、そして地霊殿。
妖怪ですら恐れる少女、その妹。
八咫鳥、猫耳の妖怪。
数々の人間とは違った生き物が住む世界、幻想郷。

「でねでね、あの巫女がそんなことをしてたの」

白髪の少女が紫髪の少女に楽しそうに話しかける。
それを横目で聞く紫髪の少女。
回りには数々のペットがわいわいと騒いでいる。
ここが元地獄だなんて誰が思うだろうか。
少なくとも過去を知らない人物はそうは思わないだろう。

「・・・こいし、少し出掛けるから留守番宜しくね」

「出掛けるの？どこ？」

こいしと呼ばれる少女はまるで子供のように行先を訪ねる。
紫髪の少女はそれを軽くあしらいい、スウ——と部屋を出て行ってしまった。

そう、まるでもう戻ってこないかのように。

「こいし様、さとり様はどちらへ？」

「分からない。お姉ちゃん何も教えてくれなかったもん」

いじけた子供のようにソファーに寝そべるこいし。

隣では猫耳の少女がちょこんと座っている。

火焰猫燐、地霊に住む妖怪。

その容姿から誰が妖怪と思うだろうか？しかし妖怪ということに変わりはない。

「さとり様帰ってくるのでしょうかね？」

お燐は首を傾げながらそう呟いた。

彼女も薄々気になっているのだろう、さとりはもう帰ってこないのではないかと。

こいしだって気になってないわけではない。

「帰ってこないときはその時だよ。あいつが現れたらそれだけの事態ってこともね」

○

特別講義だからと期待していたのが馬鹿だった。
大した内容でもなく、自分が思う将来にはとても役立つとは思えな

かった。

それでもメモは取らなければならない。レポートという地獄が待っているのだから。

「だるいったらありやしねえぜ・・・啓祐、終わったらカラオケでも行かないか？」

慶一の誘いに断ったことは無い。

俺のバイトのシフトに合わせて遊びに誘ってくれる優しい奴だからだ。

勿論、美佐子も誘うつもりなのだろう。

いつも3人で遊び、3人で笑い合う。

これほど楽しい人生が他にあるのだろうか？

少なくとも俺はそんなものは知らない。

「うーん・・・悪いけど今日はパスするよ」

断ったことは無いのだが、今日だけは何となく乗り気じゃなかった。

慶一は「そうか」とだけ言い残し講義室を出て行った。

明日もバイトは休みなので明日にしようと俺は決めつけ、ノートを抱え講義室を出る。

今日の帰りは1人。そう、何となく決めたのが事の始まり。

慶一と美佐子に別れを告げ、俺は1人で帰路に就く。

駅までの道のりを歩き、がやがやと鳴り響く商店街を通り過ぎる。

運良く駅に着くとすぐに電車が到着した。

時間帯が少しずれているらしく、車内はガラッと空いていた。椅子の端に座り、乗り換えの駅まで寝ることにした。少しだけ・・・少しだけ眠ることに・・・

（次は〇〇駅、〇〇駅で御座います）

車内に響くアナウンスで目が覚める。

どうやら目的の駅に着くらしい。

慌ててカバンを掴み、扉の前に移動する。

扉が開けば外に出、向かいのホームで電車を待つ。

毎日繰り返していれば間違えることは殆ど無い。

電車が来るまで少しだけ時間がある。

ブー、ブー・・・

ポケットに入れてある携帯が震えだす。

誰だろうと携帯を出し、二つ折り状態の携帯を開いた。

画面には美佐子の文字、そう、大学の同級生河野美佐子からのメールだった。

”遊び断るなんて珍しいね

明日もバイト無いんでしょ？明日は3人で遊ぼうね”

ありがとうとだけ打ち込み返信する。

いちいち気を使ってメールを送ってくれるのだから無視は失礼だ。メールの文面を見ながら感謝しつつ、ホームに到着した電車に乗り

込む。

自宅まで後10分程度だろう・・・帰れば晩御飯の支度が待っている。

といっても冷凍食品を温めるだけなのだが・・・

電車を降りれば自宅までは後少し。

少しの道のりがとても長く感じるが、歩かなければ自宅にが着けない。

仕方なくトボトボと足を進める。

カーブミラーの無い小さな交差点を過ぎ、自宅のアパートが見え始める。

アパートの前、トの交差点に差し掛かる。

俺は座右の目が一期一会だと言った。

一期一会とはとても大切に意味のある言葉だ。

それと同時に、恐ろしいものでもある。

人との出会いは必ずしも良いことばかりではない。

自分にとって不都合な出会いもあるだろう。

それでも俺は一期一会を大切に続ける。

そう、こうして何気に帰ってきた今も・・・

ドンッ！

誰かと体がぶつかる。

少しして顔を上げ、ぶつかった相手を視界に捉える。

これが全ての始まり、俺の人生を180度変える出来事の始まり。
紫髪の少女との出会いでも会った。

「・・・・・・・・変・・・・・・・・ですか？」

彼女はこう言い放った。俺は何も言っていないのに。

「別に・・・・・・・・変ではないですよ。むしろ・・・・・・・・似合ってますよ」

何気に言ったこの言葉が始まりだった。

何に対して似合っていると言ったのかは定かではない、服装かもしれないし髪型かもしれない。

しかし、彼女には全てが筒抜けだった。

俺が口から言わずとも全てを分かっており、言う必要が無かった。

「・・・・・・・・いきなりで失礼なのは承知の上ですが・・・・・・・・その・・・・・・・・泊めてもらってもよろしいでしょうか？」

人生が変わった瞬間だった。

第二話 「事の始まり」

大学での講義が終わり帰宅した。

いつもと変わらぬ風景の部屋。

冷凍庫から晩飯用のお好み焼きを2つ取り出し、皿に乗せて温める。俺は普段から大食いではない。それでは何故2つも温めているのか。理由は簡単だ、部屋を見てもらえばすぐに分かる。

「(・・・・・・・・何が起こったのだろうか)」

内心の俺はとても困惑している。

別に一人暮らしだから1人増えようがどうってことは無いのだが・

・

部屋の中心、そこに置かれた机の前にチョココンと座る紫髪の少女。

どう見ても20歳にも満たない少女なのだが・・・

「お好み焼きとは何でしょうか・・・」

何も聞く前に聞かなくてもと焦ってしまう。

この少女、名は古明地さとりと名乗った。

俺の思うことを俺自身が言う前に言われてしまう。まるで俺の心を読んでいるかのようだ。

不思議を超えた不思議な少女だと俺は思う。

先ほどアパートの前の曲がり角でぶつかった後、突如泊めてほしいと言い出した。

話を聞く限りじゃ別世界らしき場所から来たらしい。

知り合いなどいるはずもなく、たまたま居合わせたのが俺だったの
で俺に頼んだ、そうらしい。

本当かどうかはさて置き、流石に幼い少女を外に1人でいさせるわ

けにはいかない。

変な誤解をされては困るが、そこまで鬼だとは自分では思っていないつもりだ。

「大阪の名物ですか・・・一度食べてみたいですね・・・」

答える必要が無いのはとても楽なのだが・・・少し怖いぐらいだ。彼女、古明地さとりは何でも先に口走る。

俺の考え、思考、全てを読み取り全てを悟っている。そう、悟り。

「・・・・・・・・さとりさん、だっけか」

「はい。古明地さとりです」

こうして稀に会話が成り立つ時もあったりする。

彼女に対していくつもの・・・日が暮れても終わらぬほどの質問があると思う。

全部をぶつけていては時間が足りない、それに彼女にも失礼だろう。俺は手短に、しかし重要な部分だけを再度質問として聞くことにした。

「まずはその幻想郷という場所について知りたいかな」

彼女が言うには幻想郷は近くて遠い世界らしい。

らしいというのやはり俺自身が完全に信じていないから。

見たことも聞いたこともない世界から来たなんて誰も信じないだろう。

そしてその世界には人間以外の生物、妖怪や吸血鬼、果ては神まで存在するらしい。

本当に幻想郷が存在するならば、これほどの世界を揺るがす事象は無いだろうな。

「そして私は幻想郷、その地底にある地霊殿という場所に住んでいました。こうして外界にいる原因は分かりませんが・・・」

さとりはそう説明する。ぎこちなく。

喋り方自体にはまったく問題は無い、むしろ丁重かつ親切な説明だと思う。

ただ、視線がチラチラと移動している。定まっていない。まるで緊張している、オドオドしているかのようだ。

「それと、さとりさん自身についてなんだけど・・・」

ビクツとさとの体が震える。

まるで怖がるように、トラウマが蘇っているかのように。

その目は極限にまで潤んでおり、今にも涙の粒が零れそうな脆い瞳。変わった人だなと思いつつ、俺は2つ目の質問を投げかけた。

「とりあえず年齢だけ教えてもらっていいかな？失礼なのは分かっているけど知っておかないと色々大変なんでさ」

「ね、・・・年齢ですか・・・」

拍子抜けしたような表情でこちらを見据えるさとり。

やっとのことで視線が合ったと思えば、今度は困った表情をする。感情が顔に出る人なのだろうか・・・

「年齢は・・・その・・・」

実は童顔で20歳を超えているから言うのが恥ずかしいのか。それとも女性として年齢を暴露するのが恥ずかしいのか・・・

何れにしてもこれ以上聞くのは心が痛んできた。

俺は困惑し、顔が紅潮しているさとりにこう言った。

「まあ年齢はいいよ。ごめんね、失礼なこと聞いちゃって」
そう言って温めが終わって冷めているであろうお好み焼きを再び温める。

これは俺の直感かもしれないが・・・さとりは人と関わるのが苦手なのかもしれない。

それ以前に、幻想郷がどういう場所なのか俺には分からない。もしかしたらさとりは妖怪に囲まれて過ごしていたのかもしれない。少なくとも彼女は人間なのだろうが・・・

時は数時間進んだのだろう。

外は既に街灯の明かりのみとなっていた。

まだ季節が春なので虫もそういるわけもなく、心地良い夜風が網戸から入り込んでくる。

部屋にはテレビから流れる音声が響いており、そのテレビに釘付けになるさとりもいる。

普段は俺以外いないこの部屋に誰がいるというのはとても違和感がある。

かといって追い出すというわけでもない。何もしないならいてもらっても構わない。

・・・馬鹿を泊めたら色々とされそうで嫌なのだが。

「（・・・・・・・・不思議といえば不思議なんだけどな・・・・・・・・）」

彼女は何かを隠している。

その隠し事が何かは分からない、ただ何かを隠しているのは事実だろう。

オドオドとした雰囲気があるのを物語っているし、まるで人と関わるのを避けるかのような感じもそうだ。

彼女は人が嫌いなのだろうか・・・・俺には分からないが。

「さとりさん」

「は、はい・・・・・・・・何でしょうか・・・・・・・・」

この反応、驚いているというよりは怖がっているようだ。
考えても埒は明かないのでとりあえず流すことにする。

「何か困ったことがあったら言ってね。俺も出来ることはするから
会って半日すら経っていない相手に何故ここまで優しく接するのか。
単なる社交辞令なのかもしれない。」

それか・・・・俺の過去のせいなのかもしれない。
とにかく、さとりがいる間は不自由をしないようにしなければ。

「ありがとうございます・・・・・・・・」

不器用な笑みがほんの僅かだか漏れる。

まるで頬の筋肉が引き攣ったような笑みだったが、本人なりに頑張ったのかもしれない。

それに・・・・何だか嬉しい。

「とりあえずさとりさんの寝る部屋だけど・・・空き部屋が1つあるんだ。そこにこのベッド持っていくからそこでいいかな？」

「え、あ・・・でも・・・あなたのベッドじゃ・・・」

オドオドするさとりだが、俺は強引に話しを進める。

とりあえずベッドは持っていくことにした。押し入れに布団があるからベッドが無くて寝れる。

問題は服やその他もろもろだ。

俺は男、ましてや女性とお付き合いなんてしたことがない。

美佐子は友達だし、慶一は論外に等しい。

「んー・・・そうだ」

俺は閃いたように頷く。

しかし、出会って間もない彼女と買い物に行くなんていいのだろうか。

彼女は人との関わりを極端に嫌っているみたいだし・・・とりあえず聞くだけ聞いてみることにした。

「明日講義が終わったらさ、さとりさんの服とか日用品を買いに行こうと思うんだ。どうかな？」

お金についてはあまり追及してほしくない。いちいち気にしてもらってでは埒が明かないからな。

さとりは困った表情をするも、無くてはならない物もあるのだろう。僅かだが首を縦にコクリと振ってくれた。

「うん。じゃあ明日の夕方は近くのデパートにでも行こうか」

そう言って俺は折りたたみの出来るベッドを部屋から部屋へと運び始める。

キヤスターがついているので移動はとても楽で便利だ。

さとりはベッドを運ぶ俺をじっと見つめ、視線を合わせようとするとフイツと逸らしてしまう。

人が嫌いなのか、恥ずかしがり屋なのか・・・よく分からない。

アパート前の道は街灯と月明かりで照らされている。

網戸から入り込む夜風に当たりつつ、俺は缶チューハイの蓋を開けた。

静かになった室内で1人酒を飲む。

「・・・はあ」

何だか疲れた一日だった。

どこから来たのかも分からない少女、古明地さとり。

急に泊めてと言われたときこそ驚いたが、今となっては自然になりつつある。まだ半日も経ってないが。

人間の適応力にはつくづく驚かされる。

「これからどうなるんだろうな・・・」

誰も答えない、1人しかいないのだから。

そんな中でも呟いてしまう。やはり不安はある。

日本に住む以上、住民票や税など色々と面倒な部分がある。

さとりはそういう物には登録なんてしていないだろう。
もし追及されたらどう答えたらいいか・・・まったく分からない。
しかし、いちいち気にしては骨が折れる。

「いいよな別に・・・仕方ないもんな」

そう思いチューハイを一口、二口飲む。

度数の低いチューハイなので明日の講義には問題は無い。

俺はそれを飲み干し、臨時で敷いた布団に身を包めた。

そして静かに目を閉じる。

また明日がやって来る。いつもと変わらぬ明日が・・・

第三話 「感情の意味」

薄暗い部屋の中、1人ベッドに横たわるさととり。

妖怪には寝る必要がない、睡眠など取る必要がない。

彼女はそのまま寝なくても生きられる。妖怪なのだから。

「（・・・理解、できません・・・）」

彼女は人間が大嫌いであり、人間も彼女を心底恐れている。

自らの心を読む力いよって人間はおろか、妖怪にまで恐れられるようになる。

私を好き好んでくれるのは動物達、そう、地霊のペットだけ。

そう思っていた・・・

「（あの人間は・・・）」

少しだけ心を読むのをやめてみた。

いつもなら心を読み、相手の思考を先に暴露することで脅かしたりしていた。

しかし、相手が何を言い出すのか分からなければ相応のスリルのようなものがある。

人間が嫌いということもあって・・・

「（・・・明日が・・・楽しみです）」

人間との初めてであろう交流。

さとの胸はまるで遠足前の子供のように高鳴っていた。

そう、体が火照り、顔が紅潮し・・・

それはまるで恋する乙女のように。

しかし、さとり自身はそれに気づかない、分からない。
この感情が後に残酷な未来を招くということも・・・

朝日は容赦なく俺の体を襲う。

毎日のように眠い体を起こし、洗面所へ向かう。

朝ご飯の良い匂いが漂う中、俺は眠い目を擦って歯を磨きはじめ・・・

「(・・・良い匂い?)」

ふと疑問が頭に浮かぶ。

それと同時に、誰が何をしているのかある程度予測がつく。

俺は歯を磨き終え、すぐさま台所へ向かった。

湯気がもくもくと上がる白ごはんに味噌汁。

とろとろ半熟のオムレツ、そして良い感じに焼けているソーセージ。
一体誰が作ったのだろうか。答えは1つしかない。

「さとり・・・さん？」

まじまじとコンロと睨めっこをするさとり。

エプロンこそつけていないが、その姿は初々しい夫婦の妻のよう。

さとりに料理スキルがあったのかと感心し、早く食べてみたいという衝動に押されてしまう。

「お、おはようございます・・・その・・・よかったら、どうぞ・・・」

よかったらなんて勿体無い、俺はすぐさま箸を取り出しさとの手料理を食べ始める。

朝ご飯なんて滅多に食べない。食べるといってもパンかご飯だけだ。たまに早起きをしれみればこんなに美味しい朝ご飯が食べれるなんて・・・俺は何て幸せ者なのだろうか。

あまりの美味に俺は周りが見えなくなっていたのかもしれない。さとりさんがお茶を持ってきてくれたその時・・・

ガシャンツッ！・・・・・・ドンツ！

足を滑らせたのか、お茶の入ったコップを盛大にまき散らすさとり。そして俺目掛けて飛んでくる。

勿論、気付くのに数秒を要した俺に回避の余地など残されていたのだろうか・・・・ない。

「うおっっ！！」

回避が出来ないなら受け止めるしかない。

俺は無理に体を捻りさとりを受け止めた。

受け止めた反動で椅子がひっくり返り、俺もさとりも床へ投げだされる。

「痛い・・・そして柔らかい・・・」

後頭部を床に強打したのか、じんじんと痛みが増してくる。

そして右手、俺の右手が柔らかい物をふにと掴んでいる。

最初こそ理解できなかったものの、徐々に何を掴んでいるのかが鮮明になってくる。

と、同時に脳裏に危険の一文が浮かぶ。

冷や汗をかき、目を見開いたその時ッッ!!

バシンッッ!!

「おはよう。何だか今日顔色悪くない？」

となりで美佐子が話しかけてくる。

顔色が悪いも何も・・・左の頬を見てもらえば全てが分かる。
真っ赤に腫れ上がり、その腫れた後は誰かの右手のよう。

「夫婦喧嘩でもしたの？」

「誰が夫婦だ喧嘩だ・・・そりゃ俺だって悪いさ。非は認める。でもあんなに思いっきり殴らなくてもさ・・・」

腫れ上がる左頬をさすりながら大学の門をくぐる。

今日はこれといって特別な講義もなく、いつも通りの講義だけだ。
居残りですることこそこまではないだろう。

残ると言えば井上教授が面倒をみてくれるだろうけど・・・

「じゃあね。私先に行くから」

そう言って先に講義室へ向かう美佐子。

いつもの如く、その背中をボーと見つめていた。

後ろではこれまたいつもの如く馬鹿がぶつぶつと呟き、そしてメアドを聞いては断られるの繰り返しだった。

・・・今日も平和な一日になりますように。

講義が終われば俺は一直線に自宅へ向かう。

美佐子と慶一には事前に断りを入れておいた。

最近付き合いが悪いなどどう言っていたが、そこは何とかかっ
つてもらった。

俺は珍しい私用の為に帰路を急ぐ。

「つたく・・・何でこんな時に限って電車は延着、しかも満員なん
だよ・・・」

乗車率120%の電車に揺られようやく自宅前まで辿り着く。

部屋の明かりはまだついていて・・・さとりは準備しているだろう
か？

俺は慌てて階段を上りドアノブに手を差し伸べた。

「ただいま・・・さとりさん？」

返事がない。

そもそもただいまという単語を発したのが何年ぶりだろうか・・・

靴を脱ぎ、室内をキョロキョロと見回す。

誰もいない・・・するとある一室が頭に浮かぶ。

まったく言っていないほど使っていなかった空き部屋。

今となってはさとのりの寝室。そこを覗くことに・・・

「・・・・・・・・何と・・・」

スースーと寝息を立てるさとの姿がそこにあった。
疲れて寝てしまったのだろうか・・・起こすべきか悩む。

とりあえず軽く体を揺さぶってみた、が、起きる様子は全く無い。
どうしようかと迷っている最中、さとりがもごもごと何かを口にす
る。

何を言っているのかは分からない。ただ、はっきりと聞き取れた部
分だけある。

それを聞くなり俺の心の中はシェイクされたかのようにぐちゃぐち
やになる。

いや、俺だけじゃない、それに一番辛いのはさとり自身だ。

「・・・あっ・・・私寝ちゃった・・・」

目が覚めるなり慌てて起き上がるさとり。
突然起き上がったせいで眩暈がしたのか、ふらっと体を揺らす。
慌ててそれを受け止め、軽く背中をさすってやる。

「す、すみません・・・お出かけの方は・・・」

「ん、ああ。行こうか。さとりさんは用意大丈夫？」

コクリと頷くさとり。

俺は車のキーと家の鍵をポケットに入れ、靴を履く。

施錠を確認し、アパート裏に止めてある愛車の下へ急ぐ。

ここ数日乗っていなかったせいか、少し埃を被ったような感じがあ
るが・・・

「これは・・・」

巨大な鉄の塊を前に啞然とするさとり。

話しによれば幻想郷は技術がかなり遅れているらしい。

車というものを見るのが初めてなら驚いても仕方ないだろう。

鍵のボタンを押し車の鍵を開ける。

助手席の扉を開け、こちらから乗ってくださいと説明をする。

恐る恐る乗り込むさとりを見て少しばかり笑みが零れてしまう。

「さてと、行こうか。」

キーを差し、エンジンを始動させる。

アクセルを踏み、軽快に鉄の塊は動き始めた。

目的地のデパートへと進みだす。

そう、もしかしたら初めての異性とのお出かけかもしれない。

そう思うと胸が高鳴るが、これはあくまでもさとりさんの買い物に付き合うだけ。

俺は何を考えているんだと頭を座席にぶつける。

「・・・何をしているのですか？」

「あ、いや・・・何でもないよ。デパートまで少しだけ時間かかるから。眠いなら寝ててもいいよ」

信号が青になったと同時にアクセルを踏む。

車窓から流れる景色が珍しいのか、さとりはずっと外を向いたままだ。

俺はその姿が子供にしか見えず、またもや笑みを零してしまう。

我ながらこの状況を楽しんでいるのかもしれない。

そして、それと同時にこれが終わってほしくないという感情があったのかもしれない。

視線を前に戻したさとりの手を無意識に掴んでしまう。

幼く華奢な手だが、人間独特の温かみを感じる。

思わずぎゅっと握ってしまう。

何をしているんだと自分に言い聞かせ手を離すが、温もりだけは逃げることはなかった。

さとりは驚いた表情でこちらを見つめている。無理もないだろう。

「あつと・・・ご、ごめん」

青信号になったと同時に、慌てて謝る。

車内に気まずいのか、それとも困惑したものなのか、そんな空気が漂っている。

結局、デパートに着くまで終始無言状態だった。

そう・・・懐いてはならない感情。

人間と妖怪の恋などあつてはならないこと。

さとりを妖怪と知らない啓祐には到底理解のできないこと。

「あの・・・」

デパートの駐車場に車を止め、横からさとりが話しかけてくる。

とても困惑した表情、無理もないか・・・

と、思っていた俺の推測は大きく外れた。

「あなたのこと、何と呼べばいいのでしょうか・・・」

今思ったが、俺は自分の名前をさとりに教えていなかった。

言われて初めて気付いたが、もし言われなければずっと名無しの状態でいくつもりだったのだろうか・・・

「あー・・・啓祐でも何でもいいよ」

「それじゃ・・・啓祐さん、で・・・」

顔を紅潮させるさとり。

それを横目で見つつ、シートベルトを外す。

デパートには仕事終えた父親と共に歩く家族連れ。

まだ初々しい新婚夫婦。

様々な人達が集う中、俺とさとりも店内へ歩き出す。

春の夕日が差し込む中、丁度良い温度の店内へ入る。

デパートだけあって店舗の数はかなり多い。

えっと、ファッション系は・・・4階か。

第四話 「禁断の恋」

結論から言おう・・・可愛い一言に尽きる。

俺とさとりは4階にあるファッションコーナーへと足を運んでいた。様々な洋服店が並ぶ中、さとりが興味津々に見つめている店がある。可愛い子供服から大人っぽいクールな女性用の服が所狭しと並ぶ店主に女性の服を扱っているらしい。

「・・・見るだけ見てみるか？」

不意に話しかけられ驚いたのか、さとりは体を大きく震わせた。しかし、それ以上に興味があつたのか、コクリと小さく頷いて店内へ入っていった。

それを見届けた俺は壁際に設置されていたベンチに腰をかける。普段こういう場所に訪れることが無く、慣れない場所に戸惑っているのが現状だ。

辺りをキョロキョロと見回しつつ小さくため息をつく。

さとりは店内でおすすめの服でも着させてもらっているのかな？

「デパートか・・・」

小さくボソリと呟く。

デパートと言えば家族連れが目立つのが普通だろう。現に俺の目の前を家族連れが数多く通り過ぎている。

お菓子を強請る子供、あれやこれを見て回る婦人。
しかし、これだけは言える。皆が楽しそうだと。

「あ、啓祐・・・さん・・・」

ボーとしている俺に声をかけるさとり。

店内物色が終わったのかと思いい顔を上げてみた。

そこにはあのフリルのついた服のさとりはいなく、ただただ可愛らしい少女がいた。

色合いこそ元着た服と同じだが、少しアレンジを加えるだけで印象はガラッと変わってしまう。

思わず見惚れる俺に店員が声をかける。

「とてもお似合いですよ。どうですか？」

「え、ああ・・・いや・・・うん、似合ってる・・・」

不器用に返事をし、店員はニコニコと店内へ戻っていく。

さとりはこの先どうしたらいいのか分からず戸惑っているようだが・

「・・・その服買うか？」

その一言にコクンと頷いた。

買うと決まれば服を着替え、レジへ持っていく。

会計を済ませれば服を丁寧に紙袋に入れてもらう。

値段なんて気にしないでいい。そもそもさとりの住んでいた世界と
ここでは通貨が違うらしいからな。

「よかったな・・・似合う服見つかった」

さとりは顔を俯けたまま・・・ただ紅潮させた顔を見られたくないだけなのか分らないが。

次に向かったのは日用品コーナー。

普通に必要な物として洗面用具など買わなければならない。

「やわらかめでいいかな？」

「はい・・・一番柔らかいので・・・」

どこかぎこちないがやわらかめと表示された歯ブラシをカゴに入れる。

歯磨き粉にタオルや切れかけのシャンプーなど・・・

会計を済まし、そういえばとファッション系のブースへ舞い戻る。

「寝間着、いるよね？」

そう言ってまたも先ほどと同じ店内に入る。

寝間着と言ってもスウェットやジャージみたいなものだが。

そういう類の服が並べられている場所へ移動し、その中から似合いそうなものを選んでみる。

さとりも自分で選んでいるようだが中々定まらないらしい。

無理も無い、俺も人の事を言えないが慣れない場所ではどうしても躊躇してしまう。

「んー・・・また店員さんに選んでもらう？」

コクリと頷いたさとりを確認し、どこかにいるであろう店員を呼びに行く。

そして俺は再びベンチへ・・・このベンチが何となく落ち着く。

真横にあった自販機でコーヒーを買い暇つぶしとして飲み始める。
買い物とはこれほどまでに楽しいものだっただろうか。

少なくとも俺の記憶にそんなものはない。

無くて当たり前だろう・・・

そんなネガティブな思考を何とか跳ね除け、再びこちらへやって来たさとりを見て見惚れてしまうのであった。

デパートでの買い物を終え自宅に帰ってきた。

外は既に日が暮れ、街灯と月明かりに照らされるのみとなった。

晩御飯は珍しく冷凍食品から脱した。

デパートの食品売り場で安売りしていた鶏肉を買い占め、今現在から揚げとして調理している。

熱した油の中に投入すれば後は上がるのを待ちつつクルクルと肉を混ぜればいい。

「から揚げって言うんですね？」

「うん。美味しいよきつと」

自らの料理に自らが美味しいと言うのは少々抵抗があるが、これはあくまでもから揚げが美味しいという意味だ。

少しの時を過ぎ、カラッと揚げたから揚げをペーパーを敷いた皿に乗せていく。

無駄な脂が徐々に吸い取られていく。これを吸い取らないまま食べるのは流石に無理がある。

「それじゃ食べよっか」

机にから揚げ、白ご飯と並べていく。
今日買ったばかりの箸を握るさとの姿は本当に子どものようだ。
そして向かい合わせに座り、

「いただきます」

の合図で食べ始めた。

一口食べ、我ながらいい出来だと舌鼓を打った。

晩御飯を食べ終え、隣り合わせに座りながらテレビを見ている。

お笑い芸人が持ちネタを披露する番組なのだが、正直大半がごり押しのようなつまらない。

中には心底笑わせてくれる芸人もいるのだが・・・

「あ、・・・少し席を離れますね」

そう言って奥へ行くさとり。

俺は大して気に留めずにテレビを見ていた。

つまらない芸人がつまらない芸を披露する・・・これも世の理なのだろうか・・・

「あ、おかえり」

数分して戻ってきたさとりは隣にちょこんと座る。

トイレにしては早かったし、手でも洗ってきたのだろう。
先ほどと同じように隣り合わせに座りながらテレビを見る。
同じようになのだが・・・どこか違う。

そう、服装ががらっと変わっていた。

「着替えたの？」

と、問えば、

「はい・・・寝るときに着る物なので・・・」

と、返事が返ってくる。

あまりに似合い過ぎている為に目が合わせ辛い。

可愛いと面と向かって言えるほどなのだが、生憎俺にそんな度胸と根性は無かった。

「その・・・似合って、ますか・・・？」

そのぎこちない質問に一枚上回るぎこちなさで答えた。

「・・・似合ってる・・・んじゃないかな。うん・・・いいと思うよ」

ぎこちなさが場の空気を余計にぎこちなくしてしまう。

決して重苦しいわけではないが、どこか固い空気だった。

まだ出会って2日目、お互いのこともよく分かっていない。

ましてやさとりはどこの世界の住人かも定かではない。

そんな相手に早くも心を許してしまっている自分がここにいる。

過去の経験と辛さ・・・

それらが連なり、そして今の状況がとても楽しく嬉しい。

誰かの温もりがあり、こうして誰かと一緒にいれる。
これが俺の思い描いていた人生なのかもしれない。
人の温もりを感じ、幸せに生きたい。

「さとり、さん……」

もし、もしもの話だ。

さとりと共に人生を歩んだとすれば？

まだ出会って間もないが、俺は完全に心を許してしまっているのかもしれない。

おかしい、早過ぎると思う人が大多数だと思う。

それでも、それでも……

「さとりさん！」

俺の叫びに驚くさとり。

そして、こちらを少し見据えるなり顔を赤め俯いてしまう。
何かを悟ったのだろうか……いや、それでもいい。

俺は、一世一代の決断を下す。

「さとりさん、俺は……あなたがす——」

時が止まったような気がした。

まさかこんなことになるとは思わなかった。

テレビの音なんて既に上の空。

俺は目を見開いたまま動かさない……いや、動かせない。
閉じられた綺麗な瞳、ほのかに香る甘い匂い。

ぷにとした柔らかい感触、生温かい綺麗な唇。

誰がこんな幸せを想像しただろうか。

俺でさえ想像しなかった。

「ん・・・ぷはっ・・・」

まるでここは二次元なのか、そんな風にまで思われる。

俺とさとの口が唾液のアーチを描く。

何が起こった、そして何をした？

さとりとキスをした？それ以外に何をしたというのだ。

「・・・私の気持ちです。あなたが・・・啓祐さんが悪いのですよ・・・」

上目遣いでその言葉は反則だと心の中で叫ぶ。

まさか、まさか出会って2日でこうなると誰が予測した。

ぽっかりと空いていた俺の心に何かが埋まった、そんな気がした。

空いていた1ピースを埋めるかのように・・・

「私はいつまでこちらにいるか分かりません・・・けれど、ずっと・・・優しいあなたの傍にいたいです・・・」

遥か上空。

月明かりに照らされたその姿は月下美人。そのまま理解してもらえればありがたい。

優雅に舞う金髪の女性、夜に似合わぬ日傘をクルクルと回す。

「・・・あなたは大きな嘘をつき、そして大きな過ちを犯している」

誰もいない遙か上空で1人眩く。
田口啓祐の自宅を凝視しながら。

「人間と妖怪の恋など・・・認められないわ」

それは古くからの掟。

人間と妖怪が共存する為のパワーバランス。
それが崩される恐れがある。2人の禁断の恋。

「あなたは・・・全てを敵に回すつもりなのかしら・・・それを分かっているのしょうね」

女性の表情には美しいという文字は似合わない。
呆れ、怒り、理解に苦しむという表情。

「幻想郷を潰す者は許さないわ。どんな手を使ってでもあなたを元に戻す。抵抗するならば・・・殺す」

第五話 「旅行」

あれからというものの、俺の気持ちは浮かれたままだ。

美佐子の声もロクに耳に入らず、慶一のような扱いになってきたようにも思う。

それでもいいかと思ってしまっただけ俺の気持ちは高ぶっていた。

今日の講義が終われば明日から2日間大学に行く必要が無い。

幸いバイトのシフトも入っておらず、俺はさとりにある提案を持ちかけてみた。

これは昨夜の出来事だ。

「旅行・・・ですか？」

一冊の雑誌を机に置きさとりを持ちかけてみた。

季節は5月、6月を通り過ぎて7月。

海が恋しくなる夏の到来だ。

「この旅館の飯が凄く美味しいんだ。夜の眺めも最高だし・・・
2人で行こう？」

まるで新婚夫婦のような衝動に揺さぶられる。

パンフレットには折り目や付箋は無い、まさにこの旅館だけに絞っていたかのように。

それもその筈だ。この旅館は去年美佐子と慶一と3人で泊まりに行った場所。

ご飯も美味しく眺めも最高、そして女将さんの談話も腹が引っくり返るほど楽しい。

これ以上に良い旅館なんてあるわけがないだろうと断言出来るほどだった。

「2人で旅行・・・その・・・私・・・」

顔を赤めながら俯くさととり。

そんなさととりとは対照的にウキウキ気分の俺がここにいる。

パンフレットを丸めて何となくブンブン振ってしまうのはよく分からないが。

「・・・・・・・・啓祐さんとなら・・・はい、行きたいです・・・」

これぞと言わんばかりに舞い上がる俺をじっと凝視するさととり。

無理も無い、こうして異性と旅行に行くなんて誰でも喜ぶことだ。

ましてや俺だ。友達以上の人と旅行に行くのは初めてかもしれない。いつもはさとりに子どものようだと言っているが、今だけは俺の方が断然子供のようにだった。

「それじゃ明後日から行こう！予約すぐに入れるからさ！予約予約！！！」

電話の子機を手に取り雑誌に書かれてある番号に掛ける。

電話の主の声は聞き覚えのある声。

受付の人は去年と同じで変わっていないらしい。

「・・・はい、はい。明後日の昼頃に・・・はい、はい！！！」

少しの確認を交え電話は終わる。

運良く部屋はまだ空いていたらしい。

「楽しみだな・・・楽しみだなおい!!」

「そんなにはしゃぐと怪我しますよ・・・」

呆れ顔のさとりだが内心は喜んでいるに違いない。

俺には読心術なんてものは無いのだが・・・

さとりにだってあるわけがないだろう。人間に人の心を完全に読むなんて不可能なのだから。

「・・・・・・・・」

さとりが唇を固く閉じる。

俺のはしゃぎっぷりに呆れてしまったのだろうか。

流石にはしゃぎ過ぎたと自重し、床に静かに座り込んだ。

そんなことがあって今は帰りの電車に乗っている。

美佐子と何通かメールのやり取りをし、明日から旅行に行くと伝えた。

”1人?”と聞かれたので”2人”と答えておいた。

”誰?”と聞かれたが”内緒”と答えておいた。

すると”そっか”と素っ気ない返事とともにメールのやり取りは終わった。

電車は目的の駅に到着し、俺は足早にホームを出た。

自宅までの道のりがこんなに楽しいと感じたことはあっただろうか。

無い、絶対無い。

「（とりあえず服と日用品と・・・あ、水着買いに行かないとな・・・）」

帰ったらデパートに行こう。

さどりの水着を買わないと・・・

といっても俺は単なる付添いで、売り場に入るほどの度胸は無いのだが・・・

いや、そもそも入ること自体間違っているのかもしれないな。時には根性無しが役立つ時もあるらしい。

「と、家か・・・」

危うく通り過ぎそうになった自宅の階段を上る。

鍵のかかったノブに鍵を差し、ノブを捻る。

当たり前の動作で開いた扉の中へ声を発する。

「ただいま!」

誰も返事などしてくれないと思っていた。
でも、今は違った。

「おかえりなさい・・・啓祐さん」

紫髪の少女が出迎えてくれる。

まさに新婚の夫婦のようだが、これでも出会ってまだ2か月程度しか経っていない。

我ながら早くに馴染め、心を開けたと思う。

・・・もしかしたらお互いに境遇が似ているのかもしれない。

お互いに辛い思いをしてきたのかもしれない、だからすぐに心を開くことが出来たのかもしれない。

「そうそう、海に行くのだから水着買おう？デパート行こう！」

「み、水着ですか………」

そわそわしながらもコクリと頷いてくれるさとり。

そうと決まれば早速出掛ける支度を済ませる。

俺は車のキーを棚から取り出し、免許書と財布をポケットに突っ込んだ。

さとりはそこまで手荷物は無い。

とりあえず外出用の服に着替え……あ、勿論俺は退室。

そしてアパート裏の愛車の下へ直行したのであった。

平日ともあって人は少ない方だと思う。

入り口付近に車を止め、少しは見慣れたデパートの中へ足を運ぶ。

同じ4階のファッションコーナーでも場所が違う。

服とは別に、夏になれば繁盛する水着のコーナーへ。

俺はいつものベンチに腰をかけさとりを待つことにした。

隣の自販機で缶コーヒーを買って。

「（……俺の水着ってあったっけか）」

押し入れのどこかに詰め込んだような記憶があるようで無い。

まあいいだろう、帰って探せばそれでいい。

今はさとりの水着が決まるのを待つだけだ。

「(さとりさんといえば紫かな・・・でもたまには別の色もいいかな・・・)」

俺の脳内で繰り広げられるファッションショーは変態以外の何者でもなかった。

そんなことを繰り返しながら早30分。

1つの白い紙袋を下げたさとりが戻ってきた。

「良いの決まった？」

「は、はい・・・・・・店員さんのおすすめなのですが・・・・」

普通ならここで見せてと言うべきなのだろうが、楽しみは後に取っておきたい。

紙袋をまじまじと見つめつつ、駐車場に止めてある愛車の下へ戻ることにした。

日が暮れはじめ、徐々に月明かりが姿を現す時間帯。
ここで俺はつまらないことを思いつく。

「晩御飯さ、どこか外で食べない？」

家族連れが集まるファミリーストラン、略してファミレス。
その一角の席に座る俺とさとり。

慣れない場所に戸惑うさとりとメニューと睨めっこをする俺。

ファミレスは美佐子と慶一の3人で何度か来たことがある。
無論、ドリンクバーと何か軽い物を注文するだけだが・・・
こうしてご飯として来店するのは初めてかもしれない。

「やっぱステーキ辺りがいいよな・・・サーロインか・・・うん、
これでいいや」

自分の注文する品を決め、後はさとりを待つだけだ。
俺以上にメニューと睨めっこを繰り返すさとり。相変わらず子供の
ようだ。

俺はそれをじっと、しかし楽しげに見つめていた。

「・・・メニューが多過ぎて決められません・・・」

ということらしいので俺が決めることになった。

さとりが好きそうなもの・・・よく分からないのが本音だが・・・
がつり系の肉はあまり好きそうじゃない、だとすれば軽い食べ物
だろうか。

かといっても軽い食べ物って具体的になんだろう？

そうこうして迷っているうちに時は進んでいってしまう。

結局、さとりは目玉焼きの乗ったハンバーグというものにしたらしい。
い。

注文ボタンを押し、やって来た店員に注文するメニューを・・・
・・・

「・・・サーロインステーキと目玉焼きハンバーグを1つづ
つ」

「無反応!?! 流石にへこむぞ」

店員なのだからしっかりしろと喝を入れてやりたくなる。
ファミレスの制服に身を包んだ慶一がそこにいた。
笑いたくなってしまう。

「さては彼女か？それとも新づ——」

俺の物凄い形相に慶一は言葉を詰まらせる。

怖いのか、それともこれ以上いくと後々面倒だからなのか分からないが。

とりあえず注文する品を言い渡す。

「・・・ま、旅行楽しんできなよ。お前にとっちゃ初めてのようなもんだろ」

こいつのこういうところには本当に感謝する。

親友っていいものだ、普段は馬鹿言い合ってもいざというときは助け合えるのだから。

「サーロインステーキと目玉焼きハンバーグね。すぐに持ってくるわ」

そう言って厨房に入る慶一。

さとりはぽかんとした表情で俺の方を向いている。

「俺の親友の緒方慶一。馬鹿な奴だけど根は良い奴なんだ」

「親友・・・ですか」

さとの胸にちょっとしたもやもやが溜まる。

そう、この時初めて味わった感覚。

もやややが晴れずに溜まっていくような感じ。
初めての”嫉妬”

「さとりさん？どうかした？」

「あ、いえ・・・大丈夫です」

何も無いフリをしているのがバレバレだが、あえてそっとしておこう。

数分して注文した品が運ばれてくる。無論、慶一の手によって。

「俺のお手製料理を召し上がれ」

「嘘つけ」

馬鹿の冗談はさっと流し、運ばれてきた料理に舌鼓を打つ。

さとりもハンバーグが気に入ったらしく次々に口へ運んでいつている。

さあ、帰ったら旅行の準備だ。

綺麗な海に似合わぬ惨劇の旅行へと・・・

第六話 「忍び寄る影」

車窓から見える景色は綺麗の一言に尽きる。

山が見え、海が見え・・・

向かい合わせに座りながら微笑みあう。

「・・・さとりさんの方が綺麗だなあ」

なんてわざとらしく言い漏らす。

するとさとりは顔を赤くして俯いてしまう。

初々しい2人の姿は新婚夫婦そのもの。

もつとも、夫婦にはまだまだ遠いのだが。

辿り着いたのはとある海水浴場・・・のすぐ側にある旅館。

玄関口に置かれているボードには”田口御一行様”の文字が書かれている。

さとの苗字は古明地なのだが、今は面倒なことを避けるために田口にしてある。

一応兄妹という関係のつもりだ。

「ようこそいらっしました。田口様で宜しいですか？」

はいと一言答え中に入る。

去年と変わらぬ内装、まるで故郷に帰って来たかのようなだ。

「お部屋は103号室になります。お荷物はこちらでお運び致しますのでごつゆくりお寛ぎくださいませ」

流石旅館の丁重な接客だなと思う。

俺も一応接客業のバイトをしているが、正直ここまでできているとは自分では到底思えない。

貰った鍵を片手に自分たちの部屋を目指す。

103号室・・・そういえば去年も同じ部屋だったような気がする。女将さんが気でも使ってくれたのだろうか・・・いや、それはないか。

「んー！やっぱり落ち着くなここの旅館は」

持ってきてくれた荷物を端に置き、窓から海の方を眺める。

昼過ぎの今は家族連れなどで大変賑わっていた。

俺達も少しだけ休憩すれば海に行くつもりだ。

「・・・変な匂いがしますね」

「畳の匂いじゃないかな？自宅には和室ないから初めてなんだね」

畳の匂いは独特の香りがある。

日本人に生まれた為か、俺は畳の匂いが好きだ。

今住んでるアパートに和室が無いのが残念だが。

「持ってきた缶チューハイ一本だけ飲んで海行こう！楽しみだな！」

そう言ってかばんからチューハイを取り出す。

アルコール度数の低いやつを・・・酔ったら元も子もないからな。

照りつける太陽の日差しが眩しい。

パラソルを砂浜に差し、シートを敷けば簡単な休憩所の完成。
海の目の前、白い砂浜の上で体をほぐす運動にはいる。

「海に入るなら運動しないとな。・・・っと、いたたたたた!!」

ふくらはぎを伸ばして攣っていては説得力が無い。
運動不足丸出しだと恥ずかしさに浸される。

「大丈夫ですか・・・?」

手で抑えるふくらはぎがさとの優しい手のひらで包み込まれる。
まるで天使のよう・・・攣った痛みはどこへ逃げたのだろうか。

さとりはクスツと笑ってパラソルの下へ戻っていく。
白いパーカーを着たままで。

「さとりさんは海入らないの?」

「私は暑いのが苦手なので・・・ここでのんびりさせてもらいます」
と言ってパラソルの下にしゃがみ込む。
どこか怪しげな部分があるのだが・・・
今回ばかりは突っ込んでみることにしよう。

「さとりさんって・・・泳げないの?」

ビクッと体が震え、同時に顔を俯かせてしまう。
凶星だったのだろうか・・・よく分からないが。

「・・・幻想郷には海が無いんです。泳げないというよりかは・・・
その、怖いのです・・・」

そう言うさとり近づき、手を握る。

少々強引だが海の方へ引っ張っていくことに。

戸惑うさとりだが、楽しさを知ってもらえれば怖いものなど無い筈だ。

「とりあえずパーカー脱ぎなよ・・・脱げって言うのも変だけどさ・・・」

更に顔を赤めるさとりだが、ゆっくりと羽織っているパーカーを脱ぎ始めた。

徐々に露わになったさとのり体、それに纏わりつくように着られた水着。

白色と桃色の水玉模様、腰のあたりにフリルがついている。

一言で言えば子供っぽいのだが、さとりが着てしまえば口から出る言葉は似合ってる、可愛いの二言。

「は、恥ずかしいから・・・じろじろ見ないでください・・・」

さとりに言われて我に返る。

じろじろ見ていた自分への羞恥と、さとりへの少しばかりの謝罪を行い早速海に入る。

日光で火照った体が海水によってひんやりと冷まされていく。

おどおどと海水に足を入れるさとりだったが、何も無いことを確認

してザブツと入水した。
入った勢いで海水が顔にかかり目をゴシゴシと吹いている。

「な、あ・・・この水しょっぱいです・・・」

「海水には塩分が含まれているんだ。飲むとあれだから極力飲まないようにね」

そう言って予め膨らませておいた浮き輪をさとりに渡す。

この上に乗るんだよと説明を加えればすぐに浮き輪に乗り出した。
プカプカと浮かぶのが気に入ったのか、太陽に勝る笑みを浮かべてくれた。

・・・可愛い。

「ね、海って面白いでしょ？」

俺の問い掛けに「はい、面白いです」と答えるさとり。

浮き輪に乗ってプカプカと浮かぶさとりの隣でプカプカと浮かぶ俺。
2人でじつと地平線の方を眺める。決して見えることのない海の先を。

「この海は幻想郷にまで続いているのでしょうかね・・・」

「繋がっているんじゃないかな。もしかしたら幻想郷のどこかに海があるかもしれないね」

水中で遊んだり、海の家で飲んだり食べたり、ビーチボールで遊んだり・・・

楽しいことだらけの1日だった。

日も暮れはじめ、青かった海は夕日でオレンジ色に染められている。これもまたとても綺麗なのだが。

「あの・・・」

窓辺から海を眺めている俺にふと声をかけるさとり。
遊び疲れたのか、その顔には少しばかりの疲れが見えている。

「今日は・・・ありがとうございます」

そう言って俺の目の前にちょこんと座る。

別に気にしないでいいよと言おうとしたのだが・・・
それを言わせなかった、許さなかったのはさとりだった。

「んぷ・・・ん・・・」

夕日を背に舌を絡めるキス・・・

さとりってこんなに積極的だったろうか・・・

少なくとも会った時はそうは思わなかった。

むしろこんな関係になれるということ自体思ってもなかった。

それが実現しているのだから・・・もうどうでもいいや。

「少しだけ・・・こうさせてください・・・」

そう言って俺の胸に頭を乗せてくる。

海から上がった際にシャワーを浴びたのだが、まだ乾ききっていないのかしつとりと濡れていた。

服が少し湿るのだがどうでもいい。

その華奢な頭を優しく撫でる。

今のさとりはまるで甘えん坊の子猫のよう。

とても愛おしく感じる。

「その……………」

胸に頭を乗せながらさとりは呟く。

俺には読心術なんてあったっけな……何を言い出すか分かってしまいそうだ。

それでも静かにさとの口から発されるのを待つ。

「好きです……啓祐さん……」

○

夜風に靡く海の上、ポツカリと裂かれたそこにその女性はいた。

旅館を静かに見据え、今にも何かをするぞと言わんばかりの表情。

「……………もう、十分でしょう」

差していた日傘を閉じ、砂浜へ静かに降り立つ。

中華風のドレスがふわっと舞い、女性から独特の甘い香りが漂う。

潮風に靡く金色の髪がとても美しく、月光に照らされ更に美しさを増す。

「私も強硬な手段は取りたくありません・・・出来れば穏便に済ませたいのですが・・・」

果たして彼らは私の要求を素直に呑み込んでくれるだろうか。いや、まず有り得ないだろう。

必ず反抗する。素直に受け入れる筈がない。だとすればどうする？

「やむを得ない場合は・・・仕方ありません」

懷に忍ばせる3枚のカードに手をやる。

スペルカード・・・幻想郷での武器のような物だ。

「幻想郷の為なら仕方ありませんわ。私は幻想郷を守る為ならどんな非情にだってなりますもの」

ゆっくりとその歩みを進める。

彼と彼女の泊まる旅館へ・・・一步一步・・・

それは何かのカウントダウンなのだろうか。

彼らの仲を引き裂いてしまうのか・・・

「古明地さとり・・・戻ってもらいましょう」

第七話 「愛の意味、非情になり切れない妖怪」 (前書き)

※今回は不謹慎な表現が含まれています。

第七話 「愛の意味、非情になり切れない妖怪」

胸騒ぎがする。

別にどうってことは無いのだが、どうも気になってしかたがない。何か起こるんじゃないかと。

さとりが、消えそうな気がした・・・

海に照らされた朝日は目覚めには最高の代物だった。

普段では味わえないような気持ちの良い目覚め、それにはもう1つ理由があるのだが・・・

見てもらえば分かるように、シャンプーのほのかな香りが俺の鼻を刺激する。

普段から香る甘い香りが気持ちを高鳴らせる。

俺のすぐ横ですうすうと寝息を立てるさとり。

こんな状況で・・・どう寝ろと？

現実は一睡もしていなかった。

寝起きなんて嘘、俺は一度も睡眠をとっていない！！

「気持ちの良い朝だ・・・そして眠い・・・」

矛盾した事を呟きつつ、もぞもぞと布団から身を出す。

甘い香りが漂わないのは残念だがいつまでも布団に潜っているわけにはいかない。

朝食は8時からだっけか・・・

時刻はまだ6時半、朝食まで暫く時間がある。

窓から朝日に照らされた海を眺めつつ、目覚めの一杯を1人で乾杯した。

「……………今日で終わり、か」

旅行は一泊二日だ。

今日の昼頃には旅館を出なければならないし、お土産をいくつか買って帰らなければならない。

こうしてさとりとゆっくり過ごすのも次の休日になるのだろうか・

「……………散歩でもするか」

室内には一切の物音すらしなかった。

ただ眠る少女の寝息だけが聞こえ、金髪の女性の足音だけが響き・

・
眠る少女を見るなり女性は悲しそうな表情を浮かべる。

本音を言えばこんなことはしたくない。

自ら他人の愛を引き裂くなど言語道断、それでもしなければなら
ない。

何故なら、幻想郷を守る為ならどんな非情な”妖怪”にでもなるの
だから。

「……………楽しかったでしょうね」

眠るさとりを前に1人呟く。

あの地霊の主が人間と笑い合うなんて誰が想像しただろうか。
いや、誰も想像しない、考えもしない。

人間はおろか、妖怪にすら恐れられたあの少女が心底笑う姿など・

「……別れはその者を強くする。あなたはより一層強くなりなさい」

それは妖怪としてのさとりに向けられたのか。

はたまた、1人の少女に対して向けられたのか……

知る者は金髪的女性、八雲紫にしか分からないだろう。

幼く華奢な体を軽く持ち上げる。

丁寧を抱きかかえるその姿はまるで王子とお姫様。

しかし、これはあくまでも非情な出来事。

第三者によって1つの愛が裂かれるのだから……

「後の事は私が承るわ。あの少年には私か——」

ダンダンダンと足音がする。

それはとても力強く、そして怒りが込められているかのよう。

足音は段々と近づく、大きくなっていく。

紫は一步も動かない。まるでその場に縛り付けられているかのよう
に。

ガラッ！

勢いよく扉が開かれる。

そして足音の主は叫ぶ。

自らが初めて愛した者を抱くその女性へと……

「何・・・してるんだ!!」

その表情には怒り以外に何も無かった。
ただ金髪の女性に対する怒り、憎しみ。

「私は幻想郷の管理者であります、八雲紫と申します。以後お見知りおきを」

「そんなことはどうでもいいんだ。何をしてるのか聞いてるんだよ!!」

今にも殴りかかりそうな少年は何とかそれを堪えているらしい。
しかし、現実はそのほど甘くは無い。

「見ての通り分かりませんか？私は彼女を元の世界へ連れ戻しに来ただけですわ」

少年は我慢する、必死で堪える。
でも・・・現実は待つてはくれない。
紫は指をパチンと鳴らすや空間に裂け目を作る。

「彼女はとても幸せだったと思うわ。今まで生きてきた中で最高にね」

そう言ってスキマに足を入れる。
その先は外来人にすれば未知の世界、そして踏み入れてはならない世界。

「それでは御機嫌よう少年。あなたと彼女の記憶は操――――」

何を言いかけたのだろうか。

紫は言葉を詰まらせる……いや、止めた。

それは本人の意思で止めたわけではない。

目の前にいる、ちっぽけな人間の行動によって。

躊躇なく投げられたそれは紫の白い肌を掠り、赤い液体をポタポタと垂らさせた。

[illegible]

無防備でも突っ込む。

無理だと分かっているにも突っ込む。

固く握られた拳に目一杯の力を籠めて。

「この野郎があああああああああ！！！！！」

重い一撃が振り下ろされる。

その拳にはさとりの愛、愛おしさが込められ……

しかし、紫にはそんなものは蟻を潰すよりも簡単なこと。

自身の目の前の空間に裂け目を作り、そこへ少年を引き落とす。

勢い余つて落ちるに違いない。誰だつてそう思うだろう。

賢者とまで呼ばれるスキマ妖怪、八雲紫だってそう確信したのだから。

「小細工してんじやねえ!! 返せ!! さとりを返せ糞野郎があああああああああ!!」

これは本当に人間なのか？

紫の背筋が凍りつく。

賢者とまで謳われる八雲紫の表情までもが凍りつく。

あのスキマを、空間操作を無視して突っ込んでくるなんて有り得な

い!!

ドゴンツッ!!

重い一撃は躊躇なく紫の腹へ抉りこまれる。

全身の力が一斉に抜け、抱きかかえていたさとりを落としてしまう。
口から鉄の味がする・・・吐血。

「さとりさん!!」

床に倒れるさとりに近寄る。

眠りから覚めたのか、それとも一連の出来事で目が覚めていたのか。
俺を確認するなりすぐさま抱きついてくる。

怖かっただろう・・・

俺は優しく背中を撫でてやる。

「逃げよう!!ここは危——」

ズドンッと、襖に激突する鈍い音。

八雲紫の一撃は人間には重すぎる一撃。

ぐったりと項垂れる啓祐、最早ピクリとも動かない。

「いや・・・いやああああああああ!!」

喚くさとり、妖怪らしくない。

「若造が・・・お前は死に値する。私が今ここで葬りさってあげる
わ!!」

―紫奥義「弾幕結界」

それは人間はおろか、並大抵の妖怪ですら太刀打ち出来ないほどのスペル。

弾幕が徐々に押し寄せ、囲み、死へと誘導する。

意識の無い相手には地獄ともいえようスペル。

啓祐に勝ち目はおろか、生きる希望すら与えない。

「私だってこんな強硬手段は取りたくなかったわ。けれど、あなたの抵抗によってそれは不可能となった。精々自らの行動を後悔することね」

弾幕が徐々に押し寄せる。

幻想郷以外で弾幕など見ることも知ることも無い。

意識の無い中、これを避けるなど無理、不可能。

意識があっても同じこと。

「あなたの努力は認めるわ。この妖怪をどれだけ愛していたかもね
！！」

弾幕は啓祐のすぐ傍まで押し寄せる。

あと一歩で全てが終わる、紫はそう確信していた。

今日は自らの勘を後悔する一日なのだろうか。

これほどまでにイレギュラーが起こるだろうか？

「……………やめて、ください…………」

紫髪の少女が立ち上がる。

力量の差は明らか、太刀打ちなどできる筈も無い。

それでも立ち上がった。

自らを愛してくれた者を守る為。

私を心底愛してくれた人間を守る為！！

「この人を傷つけるのはやめてください！！」

紫は呆然とする。

幻想郷は妖怪と人間が住む世界だ。

それぞれが掟を守ることによって共存が成り立っている。

それ以上に互いに親しく接する者達もいる。

ただ、これまでに人間と妖怪の愛などは見たことも聞いたことも無い。

しかし、それが今目の前で起こっている。

予測も出来ない、何が起こるかも分からない。

パワーバランスが崩れるかもしれない、幻想郷そのものに影響が出るかもしれない。

あらゆる事態を予測し、古明地さとりを回収するということで一段落するだろうと考えた。

でも、それは甘かったのかもしれない。

本当に甘かったのは私自身だったのかもしれない。

「・・・・・・・・いいわ」

弾幕結界を掻き消す。

まるで最初から何も無かったかのように・・・
その部屋は綺麗さっぱり元通りになっていた。

「一日、明日の晩まで猶予をあげるわ。それまでに全てを決めなさい」

そう言ってスキマに体を潜らせる。
まったく、つくづく甘過ぎると思う。

「あなた自身がどうしたいのか、その少年はどうしたいのか」
姿こそ見えないが、声だけは部屋に響く。

「幻想郷は全てを受け入れるのよ。それはそれは残酷な話ですわ」
それはさとりへの1つの救いなのかもしれない。
自らの甘さを分かりつつも、それでもやはり非情になり切れない。
いくら幻想郷の為とはいえ、どうしても甘さが優先してしまう。
普段は胡椒臭くとも、根はこういう妖怪なのだ。

体が痛む。

それとは別に、頭に柔らかく、温かい感触がする。
ゆっくりと目を開ける。

目を真っ赤に腫らし、今にも泣き崩れそうな表情のさとりがいる。
何故そんな表情をしているのか・・・
そうか、俺はあの人に殴り飛ばされて・・・

「・・・!! 啓祐さん!!」

俺が瞼を開くと同時、さとりが叫ぶ。
ゆっくりと痛む体を起こす。

よほどダメージを受けたのだろう・・・意識を保つだけで精一杯な

のかもしれない。

「よかった・・・よかった・・・」

ポロポロと涙を零すさとり。

俺はなけなしの力を右手に籠め、泣きじゃくるさとの頬を優しく撫でる。

「・・・ごめん、な・・・」

そしてさとりを抱き寄せる。

温かい体温が体中に染み渡る。

本当に温かい、そしてこの温もりを手放したくない・・・

「・・・寝ていてください。起きてちゃ駄目です・・・」

そう言って俺の体を横にさせる。

その上から覆いかぶさるかのように、唇と唇を重ね合わせる。何度何度も・・・愛おしいように重ね合わせる。

涙を零しながら、二度と離すもんかと言わんばかりに・・・

第八話 「決意は未来へ」

翌朝の自宅には2人の姿があった。

全身打撲で満足に動けない少年と、せっせと家事をこなす少女。
今日は大学のはずなのだが・・・生憎行けないのだろう。

「ごめんねさとりさん・・・色々やらせちゃって」

「全然構いませんよ。休めるときぐらいいっぱい休んでください」

掃除機を引っ張りながら床の埃を吸い取っていく。

ブオーと部屋中に掃除機の振動が鳴り響き、テレビの音を掻き消す。
そんな中、少年少女は今後について深く考えさせられていた。

八雲紫、彼女は幻想郷の管理者と名乗った。

さとりを連れ帰り、全てを元通りにすると言った。

俺は我を忘れてさとりを助けようとしたが歯が立たなかった。

「(・・・・・・・・どうすりゃ・・・・・・・・いいんだ・・・・・・・・)」

悩んでも答えは出てこない。

それはまるで迷宮の迷路に迷ってしまったように。

「・・・大丈夫ですよ。私は・・・もうどこにも行きませんから。

あなたの傍にずっといるって決めましたから」

掃除機の音が止むと同時、さとりはそう口走った。

とても嬉しいのだがどこか引かかってしまう。

そう、さとの故郷、幻想郷についてだ。

「さとりさんは・・・帰りたいとは思わないんですか？」

その質問にさとりは黙り込んでしまう。

そりゃ誰だって故郷に戻りたいのは当然のことだろう。

さとりは無理をしてここにいると言ってるのではないのか？

そういう疑問が湧いてきてもおかしくはないだろう。

「・・・・・・・・少し、お話をしてもいいですか？」

人も妖怪も、自ら口にしない限り思っていることを知られるなんて嫌だろう。

それを可能にしてしまう能力、”読心術”

とある世界には読心術を持った少女がいたそうだ。

彼女は心を読めるというだけで人間や妖怪からとことん嫌われた。

皆が自分から離れていき、気が付けば妹と2人だけだった。

常に孤独を味わい、誰も相手にしてくれなかった。

そんな私を好いてくれたのは動物達、今というペット達だった。

言葉を話せない彼ら彼女らは私の読心術を大いに気に入ってくれた。

今となっては地霊殿にはペット達がたくさん住んでくれている。

そんな人間や妖怪との関わりを絶っていた私。

いつの間にか知らない世界へと足を踏み入れていた私。

今思えばあの散歩と称したお出かけが私の末路を変えたのかもしれない。

1人の少年と出会い、私は人間と関わるということを味わった。

彼はとても優しく、有無も言わずに私を家に泊めてくれた。

ご飯も作ってくれる、洋服だって買ってくれる。

旅行にだって連れて行ってくれる、私を命がけで守ろうとしてくれる。

私は幸せ者なのかもしれない。

人間を毛嫌いしていた私が人間と共に人生を歩む。

こんな妖怪の私でも・・・居場所があったんだと・・・

さとの瞳から涙がぽろぽろと零れていた。

常に孤独で生きてきたその境遇は俺と似ているのかもしれない。

幼い頃に両親を亡くし、祖父祖母に育てられてきた。

まだ幼かった俺に両親の死とは辛い以外の何物でもなかった。

俺は無口、無表情。

誰とも喋らず遊ばず、ただひたすら孤独に生きてきた。

そんな俺にも今こうして幸せに生きることができている。

親友が出来、さとりとこうして出会い、共に暮らしている。

これがどれほどの幸せか・・・過去の自分じゃ希望すら抱けなかっただろう。

「さとりさん・・・」

俺はそっとさとの体を抱き寄せる。

泣きじゃくり、冷え切ったその体を目一杯抱きしめる。

じんわりと温もりを分け与え、辛かった過去を共に分かちあおうと・・・

「啓祐さん・・・・・・・・こんな私でも・・・ずっと一緒にいてくれますか・・・」

さきほどと比べて更に力を込める。

もう離さない、お前は俺と共にいるべきだと。

そして耳元で小さく呟いた。

「さとりさんが何であろうと・・・俺はずっと傍にいます。たとえばこの地を離れることになっても・・・」

再び唇同士が重なり合う。

もう幾度も交わしたキス・・・

それでも気持ちは変わらない、たとえば世界が破滅しようとも・・・

・・・部屋には暫く静寂が漂った。

光だけが差し込むその部屋で2人の少年少女は抱き合っていた。

そして、まるでタイミングを見計らったかのように彼女は現れる。

スキマを掻い潜り、空間の裂け目から突如として現れる。

「あなたのその言葉、しっかりと聞かせてもらったわ」

金髪の女性はふわっと地に舞い降りる。

少年少女は敵対する意思は見せない。

最早2人にとって八雲紫は敵ではない、むしろ恩人とも呼べるべき存在なのかもしれない。

「覚悟は出来まして？」

「ああ・・・連れて行ってください。僕もさとりさんも・・・幻想郷へ」

少年の瞳に嘘は無かった。

真っ直ぐに紫を見据えるその瞳にあるのはただたださとりを守り抜くという決心のみ。

もう二度とこちらへは戻れないかもしれないのに・・・そんなことはどうでもいいらしい。

最早彼にとってさとりとは全てなのかもしれない。

あの悟りの妖怪が・・・幸せ者になりやがってと。

「・・・今晚0時に再び迎えにきますわ。それまでに全ての準備と決別を終えなさい」

そう言って風の如く消え去る紫。

最後に少年を見据えた彼女の瞳には何が映っていたであろう。

それは彼女自身にしか分からない。たとえ読心術をもってしても・・・

「・・・・・・・・よかったのですか・・・？」

さとりはこちらをじっと見つめる。

俺がこの世界を離れることに心配しているのだろう。

それについては心配ご無用だ。

俺にはさとりがいればいいのだから。

そこまで俺がさとりに夢中になってしまったのだから。

「さとりさんがいればいいんだ・・・もう、後悔なんてしてないよ」
そう言って再び抱きしめる。

今度こそずっと一緒だと。

それは永遠の愛を誓う新郎新婦のように・・・

「紫様!!」

彼女は紫に向けて声を荒げる。

無理も無い、今回彼女の取った行動は極めて危険なことだったのだから。

「私は眠いのよ藍・・・少し寝かせて頂戴」

「しかし・・・!! また外来人を連れ込むつもりなのですか!?!? あれほど駄目だと・・・」

「藍」

紫は鋭く、真剣な眼差しで八雲藍を見据える。

その圧倒的な存在感に押される藍。

紫は危険を承知の上で行ったのだ。今回の行動を。

「確かに下手をすれば幻想郷のパワーバランスは崩れるわ。ましてや・・・人間と妖怪の恋など前例に無い」

紫は全てを分かっている、幻想郷の現在の状態も、彼らが来たことによって起こる可能性のある事態も。

それを全て踏まえ、それでも今回の行動に移った。

彼女ほどの力があれば人間はおろか、あの悟りの妖怪だって瞬殺出来る筈だった。

しかし、彼女はそれを実行しなかった。

「それでも・・・面白いじゃない？それに今の幻想郷には少し必要な刺激だと思うの」

楽しげに語る紫の表情は微笑んでいた。

後にも先にも見せたことのない、愉快的表情。

困惑しきる藍を無視して話を続ける。

「それにね藍、私は少しの賭けをしようと思うの。彼らにその賭けを託して・・・」

今現在、幻想郷のパワーバランスは危機に直面している。

博麗の巫女のおかげでそれはなんとか保たれているが、彼女1人では限界もある。

上級妖怪こそ人間は襲わない、そこに立ちはだかるのが中級、下級妖怪の大群だ。

幻想郷には鬼、吸血鬼、妖精、神と多種にわたる者が存在する。

それら全てが力を合わせれば他の妖怪など塵にすらならないだろう。しかし、幻想郷に協力なんて言葉は殆ど皆無に等しい。

「彼らは最後の希望と言ってもいい。もしかすれば、幻想郷が良い方向へ向かうかもしれない」

ただしそれは危険な賭け。

そもそも何の能力も持たない人間が人里以外で暮らすこと自体危険なこと。

それでも紫は賭けに出てみると誓ったのだ。

「賭けは当たり外れがあるからこそ楽しいもの。それに・・・私が賭けで負けたことがあるかしら？」

外は既に暗闇と化している。

街灯の調子が悪いのか、チカチカと点滅しながら外を照らしている。部屋には大きめのキャリーケースと小さなキャリーケースが1つづつ。

彼らはこの地を離れる、その決心の表れだ。

「準備はよろしくて？」

金髪の女性は愉快に微笑む。

「ああ・・・我儘を聞いてもらってすまない・・・本当なら俺はここにいてべきなのに・・・」

「構いませんわ。どうせ、彼女1人を連れ戻そうとすればあなたは必ず私と敵対する」

ははっと俺は苦笑いし、大きい方のキャリーケースの取っ手を握った。

隣にいるさとりは小さなキャリーケースの取っ手を掴んだ。

もうこの地に戻ることはないだろう・・・

親類と親友にはありがとうとメールを送った。

アパートの契約は解除した。

もう・・・未練は無い。欠片たりとも残っていない。

「あなたの決心には感謝致しますわ。では・・・ようこそ幻想郷へ」

空間が裂け、俺とさとりはその中へ入り込む。

これからどのような未来が待っているのか、正直予測不能だ。

それでも俺はこの道を選んだ。

さとりを守る為・・・

それだけが俺の使命、そして決意。

俺は未知の世界へ足を踏み入れる。

これから先何があるとも・・・さとりを、守るんだと。

第一章　―完―

第一章を終えて・・・

えー、初めまして。

当小説をご愛読頂き誠にありがとうございます。

1／4の深夜から書き始め、今日で3日目突入です。

ハイペースで書き続け3日で一章が終わりました。

一章と言っても8話しかないんですけどね（焦

さてさて、次回からはオリキャラ主人公とさとりが幻想郷入りです。
現代入りなのに幻想入りという部分に関してはあまり気にしないで
ください（え

幻想郷編ではどのように話を進めていくか、それはまだ検討の段階
です。

どのようにどこでどのキャラを出演させるか・・・
ただメインが地霊殿になるのは必然でしょうね（笑

それでは、この先もご愛読頂ければ幸いです。

これからも一層努力致しますのでどうか宜しくお願いします。

第九話 「始まりの始まり」

幻想郷は全てを受け入れる世界。

それはそれは残酷な話。

そんな世界に彼はやって来た・・・

降り立った地はまさしく自然そのもの。

辺り一面は森、草、川。

人間はこんな自然の中で暮らしていたのかと思うと信じられなくなる。

俺が都会に住んでいたのもあると思うが・・・

「ようこそ幻想郷へ。これからあなた達には地霊殿に行ってもらいますわ」

地霊殿、名前からして地下世界かその類の場所なのだろう。

幻想郷へ来る最中のスキマ内。

そこで紫から大方のことは教えてもらった。

幻想郷はどのような世界なのか。

さどりの住んでいる地霊殿とはどのような場所なのか。

幻想郷で生きていくためにはどうすればいいのか・・・

「心配ご無用よ。3分で到着しますわ」

パチンと指を鳴らせばスキマが開く。なんとも便利な能力だ。

そうそう、この世界には人間のみならず多種にわたる者が住んでいるらしい。

俺が小さい頃から知っていたものなら魔法使いや吸血鬼、妖怪など。妖怪といってもそこから多種にわたる妖怪の種族があるらしい。当たり前だと思うが俺は種族人間だ。

「・・・啓祐さん」

さとりが俺の服の裾を掴む。

その仕草は怖がる子供が親に縋り付くようなもの。

・・・可愛い。

「地霊殿には私の妹やペット達がたくさんいますが・・・皆良い子ばかりなので大丈夫ですよ」

「動物は好きだから大丈夫だよ。妹さんにも会ってみたいね」

こんなことを言っているが、本音を言うと不安で仕方がない。

無理も無い、殆ど突発的に別世界へ来たのだから。

それもこれから住む場所は地下という・・・不安が募るのも当たり前だろう。

「着きましたわ」

再び降り立ったそこは夏場にも関わらずひんやりと涼しかった。

それとは対照的に、奥の方では明かりがチラチラと見え賑わっている。

紫の言っていた繁華街なのだろう。

「それでは私はここで帰らせてもらいますわ。生憎、ここには良い

思い出が無いもので」

「うん、わざわざありがとう紫さん・・・言葉では言い表せないほど感謝してるよ」

「お気になさらずに。それではお幸せにお二人さん」

そう言ってスキマの中へ帰っていく。

数秒して紫の気配はプツリと途切れた。

繁華街にも行ってみたい気もあるが、今は地霊殿に行くのが先だ。事前に何も言っていない為、さとりと共に行かなければ侵入者扱いされるだろう。

「地下なのに明るいんだね。電気はどこからきてるの？」

「河童達の技術で電気をこちらへ送ってくださっているみたいなんです。私もそれに関しては無知なもので・・・」

幻想郷に住む河童は技術力が凄いらしい。

外の世界、つまり俺の住んでいた世界の技術に興味を持ち、それが発端になったと紫に聞いた。

かなりオーバーな部分もあるみたいなのだが・・・

「着きました。ここが地霊殿です」

何とも威圧感のある建物だ。

扉を開けば中はどうなっているのか・・・想像がつかない。

俺はこれからここに住む、そして生活をしていく。

・・・正直不安が募るばかりだ。

「お姉ちゃん」

後ろから声がかかる・・・後ろから？

驚いた俺は咄嗟に後ろを振り向く。

しかし、そこにはただ静かな空間があっただけで・・・

「お兄さんが啓祐って人？」

今度は扉の方から声がする。

またもや咄嗟に振り向こうとしたのだが、振り向くフリをしただけであって・・・

「！？だ、誰ですか・・・」

白髪に緑色の瞳の少女・・・

服装はさとりに似ているが、色合いがまったく違って違う。

そしてその少女は俺の方をまじまじと見つめる。観察するかのよう
に。

「勘が良いんだ。私の姿を見れるなんて珍しい人間だね」

「こいし、こちらへ来なさい」

さとりに言われて俺の前から立ち退くこいしと呼ばれた少女。

彼女がさとりの言っていた妹なのだろうか・・・確かに似ている。

「私の妹のこいしです。ご迷惑をお掛けしてすみません・・・」

ペコリと頭を下げるさとり。

俺は別に良いよと言いきいしの下へ歩んだ。

「突然押しかけてごめんね」

「ううん。話は聞いてたからいいよ。私だって少しは楽しみだったし」

どうせ紫が先に話をしていたのだろう・・・あの人の考えることは正直よく分からない。

胡椒臭いというのが似合うのだろうけど、俺にとってあの人は今の人生を作ってくれた恩人でもある。悪い人じゃない、根は良い人なんだ。

「啓祐さん、中へ入りましょう」

さとりに言われて地霊殿の中へ足を踏み入れる。

新たな人生の幕開け、そして悲劇の幕開け。

幻想郷では何が起こるか分からない、そう、それは紫でさえも予知しきれぬこと・・・

「掃除中に邪魔をするな勝手に入るなくつろぐな」

幻想郷の端に位置する神社、博麗神社の巫女さんこと博麗霊夢は箒片手に縁側に向かって叫んでいた。

そこには綺麗な金髪女性こと八雲紫がぐったりと寝転がっていた。まるで自然に溶け込むかのような感じなのだが・・・

「いいじゃない、どうせ参拝客なんでこないのでしょ？」

「そういう問題じゃない、寝転がりたいなら掃除の手伝いでもしなさい」

せつせと落ち葉を掃く霊夢を横目に、紫は神社から見える景色を眺めていた。

その先には地上からは見えぬ場所、地霊殿があるのだろう。彼女の瞳には何が映っているのか・・・

「……………お腹が空いたわ」

最早霊夢の耳には届いていないらしい。

落ち葉を掃き終えた霊夢は箒を地面に置き縁側に座った。

皿に盛られている煎餅を一枚手に取り、パリパリと食べ始める。

「私も食べていいかしら？」

「駄目って言うっても食べるんでしょ？ていうかもう食べてるじゃない……………」

パリパリと煎餅を食べる霊夢と紫。

これでも幻想郷の異変を解決する異変解決屋でもある。今の霊夢にその面影はないが・・・

「……………どうせまた面倒なことでもしたんでしょ？」

分かっているかのように霊夢は呟く。

やれやれとため息をつく紫は煎餅を食べ終えこう言った。

「面倒ではないわ。あなたも分かっているでしょうけど・・・今の幻想郷には必要なことなのよ」

「必要ねえ・・・私に危害が及ばないなら別にいいけど」

二枚目の煎餅を食べ始める霊夢。

彼女の視線は青い空、虚空を見つめている。

彼女は巫女であり異変解決屋でもあり、幻想郷を保つ為の博麗大結界の管理人でもある。

かなり重要な役割なのだが、彼女はそういう類のことは面倒らしい。博麗の先祖がこれを見たらどう思うか・・・

「・・・・・・・・少し野暮用が出来たみたいね」

そう言って境界を操りスキマを出現させる紫。

さっと入ってはさっと閉じる。

神出鬼没と呼ばれるのはこれが原因なのだろう。

「・・・はあ、当分の間は暇が無くなるのね・・・それはそれで嫌ね」

霊夢はため息をつきつつも立ち上がる。

飛び立ち、目指す場所はある森の中。

本人には言っていないが、彼女の友でありライバルでもあるとある人物の下へと・・・

「お兄さん、ゆで卵食べよう！」

霊鳥路空、さとりのペットでもあり地獄鴉らしい。見た目から想像がつかないのだが・・・

彼女の手にはゆで卵がたくさん入ったざるが握られている。

これほどの卵を食べたら高血圧で死んでしまいそうなのだが・・・

「お空、無理に食べさせるのはやめなさい」

「うにゅ・・・じゃあ一個ね！」

そう言ってゆで卵を1つ受け取る。

お空はざるを持ったまま奥へ走っていった。

・・・なんとも賑やかな場所だ。

「ごめんなさいね・・・あの子ったら人懐っこくて・・・」

「いや、すぐに馴染めて俺は嬉しいよ。お隣って子も面白いしね」

地霊殿にやって来て数時間、俺はまるで元から住んでいたかのような感覚に陥っている。

それもこれも彼女たちがあまりにも人懐っこいからだ。

お空はゆで卵が好物らしく、時間が経てば俺にそれを食べるかと勧めてくる。

お隣は猫の妖怪らしい。猫車に乗せてもらい地霊殿を軽く案内してもらった。

こいしはさとりの妹、神出鬼没でどこでどう出会うか分からない。ユニークなこの場所は案外すぐに馴染める気がする。

「・・・よかったよ、俺はここに来れて。さとりさんと一緒にいれ

るならどこでもいいんだけどね」

そっとさとの傍に寄る。

顔を赤めながらも俺に近づいてくれるさと。

「啓祐さんは・・・言うことが大胆なんですから・・・」

「やっぱりそういう関係だったんだ。私の勘も少しは鋭くなったのかな」

ビクッと体を震わせ離れる啓祐とさと。

こいしが愉快そうにニコツと笑みを浮かべている。

「お姉ちゃん笑うようになったね。私、お姉ちゃんのそんな表情見たことないよ」

確かにさとりはよく笑ってくれるようになった。俺だってそう思う。

さとの笑顔は俺にとって癒しの他のなんでもない。

さとりが笑ってくれば俺までもが嬉しくなる。

「よかったねお姉ちゃん」

こいしも笑う。

それにつられるようにさとりも、俺も笑う。

地霊殿、悪い場所じゃない。

もし願いが叶うとするなら、ずっとここで暮らしたいと思う。

無論、さとりと一緒だけど。

「そうだお姉ちゃん、パーティーしようよ」

第十話 「嫉妬」 (前書き)

初前書きです (笑)

今回は少し急展開、超展開になってしまったかと・・・
それでも読んでくれるあなた様には感謝感激です。
それでは宜しくお願いします。

第十話 「嫉妬」

そこは暗い暗い、一筋の光すら差し込むことのない暗い世界。全てが終わり、何も始まることのない消えた世界。

そんな世界に二つの人影があった。

漆黒の服に身を纏い、銀髪のをくるくると指に巻きつける男。肩甲骨辺りまで伸びた髪をゆらゆらと揺らしながら歩く少女。彼らの表情に光は無い。

あるのは憎しみと、そして希望を捨てた暗い表情。

「・・・どうだ」

男は小さな声で呟く。

何かを操作している少女は男の声を聞き、数秒して答えた。

「数値は安定してます。このままいけば数日で侵入できるかと・・・」

「そうか」

質素な返事と共に煙草に火をつける。

口から吐く副流煙が少女には辛いらしく、顔をしかめながらその場を離れた。

幻想郷・・・楽しいな場所だ。

「それじゃあお兄さんとお姉ちゃんの結婚を祝っ——痛っ！」

さとりが顔を最高に紅潮させながらこいしの頭を叩く。
涙目になりながらさとりの頭を叩く2人の姿は姉妹喧嘩そのもの。
お空とお燐と3人でそれを見つめる。

「・・・いつもあんな感じなのか？」

「さとり様もこいし様もいつもは仲良しだけどねえ・・・ほら、喧嘩するほど仲が良いって言うしさ！」

確かにそれは一理あるかもしれない。

喧嘩が出来るのは喧嘩をしてもその仲が途切れないから。
互いに信頼してなければ出来ないこと。

だとすれば、さとりとこいしは最高の姉妹なのかもしれない。

「いいじゃん！お姉ちゃん、お兄さんと結婚したいんでしょ！？」

「な、な、・・・そそ、そういうことは言うもんじゃありませんこいし！！！」

パーティーは波乱の幕開けだった。

姉妹喧嘩が収まりそうになく、俺は1人席を外した。

地霊殿はお燐に軽く紹介してもらったが、詳しく見たわけではない。
気になる箇所もあると言えはある。

ただし、勝手に物色する気にはならないしなれない。

「・・・幻想郷・・・地霊殿、ねえ・・・」

俺にとってこういう世界はまさに非日常的なものだ。

紫さんが良い例だろう。

境界を操って空間を裂きスキマを作る。

普通そういうことは出来ない、不可能だ。

それを容易く成すのだから非日常なんだ。

しかし、今の俺にはそれが日常となりつつある。

元の世界・・・日本が非日常になる日も近いかもしれない。

「・・・・・・・・ん」

後ろに気配を感じ、咄嗟に振り向いた。

頬を赤く腫らした紫髪の少女、古明地さとりがテクテクと歩いてくる。

俺を探しに来たのだろうか・・・姉妹喧嘩は思ったより早く幕を閉じたい。

「こんなところにいたのですね・・・」

「わざわざ探しに来てくれたのか・・・ごめんな」

さとりの頭を撫でてやる。

こうするとさとりは喜ぶ、あの笑顔が間近で見れる。

「こいしったら・・・ごめんなさい、あんなことになっちゃって・・・」

申し訳なさそうに謝るさとり。

謝らなくてもいい、むしろ・・・嬉しかったぞ俺は。

と、心の中で呟くとさとりは更に顔を赤めた。

「あの、ですね・・・啓祐さんの世界では・・・け、結婚というも

のは・・・どんな感じなのでしょうか・・・」

一般的なものは新郎がタキシード、新婦はウェディングドレスを着るやつか。

教会で愛を誓うやのケーキ入刀だの披露宴だの・・・
知り合いが結婚しないのでいまいち分からないのが本音だけど。

「ま、そう深く考えることはないよ。・・・結婚、ねえ・・・」

考えているうちに俺までもが顔を赤めてしまう。

誰もいない廊下で男女が顔を赤めて立ち尽くすなんて・・・何のドラマだこれ？

「あ、あの・・・」

呼ばれて振り向けば、待っていたのはさとりの間近に迫る幼い顔。そのまま吸い込まれ、唇が重なり合う。

甘い香りが漂う・・・何て良い香りなんだろう。

舌が絡まり合う、こんなキスが出来るなんてここは夢か樂園か？

・・・なんて考えていたのは数か月前のこと。

今となってはこうしてキスをするのが当たり前になりつつある。

「ぷはっ・・・・・・啓祐さんの・・・味がします・・・」

大胆に言うのはさとりもだぞと心の内で呟く。

ニコツと笑みを浮かべるさとり、そして俺に背を向ける。

「早く始めましょう・・・啓祐さんのお祝いパーティー・・・」

「ああ・・・楽しみだ」

小走りでその場を去るさとりを追いかける。

広い廊下に2人の足音がカツカツと響く。

誰もいなくなった廊下には静寂が戻り、それは一種の不気味を生み出す。

「・・・・・・・・」

誰も気づかない。

彼女は無意識に現れ、無意識に去る。

そう、無意識に生まれる感情も・・・
姉に対する、嫉妬や殺意までも・・・

「このキノコとこれを混ぜて・・・うおあ!？」

ボンッッ!!と爆発音が響く。

森の中に佇むこじんまりとした家、その中から白黒の衣装を纏った少女が出てくる。

霧雨魔理沙、幻想郷に住む魔法使いだ。

「ちい・・・最近上手くないぜ」

「最近じゃなくていつもでしょうが。少しはまともな実験したらどうなのよ」

魔理沙の目の前に降り立つ巫女さんこと博麗霊夢。

それを見て爽快な笑みを浮かべる魔理沙。

彼女達は幻想郷の異変解決屋。

もつとも、魔理沙は解決屋ではないのだが。

「そーいや霊夢、最近変わったことないか？」

「あるも何も・・・そのうち暇がなくなるわよ」

めんどくさそうに呟き、近くにあった手頃な切り株に腰をかける霊夢。

ほうきを片手に帽子のつばを触り、ふわっと浮き上がる魔理沙。

「・・・どこに行くの？」

「霊夢と同じだぜ。やるならさっさとやった方が楽だぜ？」

やれやれと言わんばかりにため息をつき、これまらめんどくさそうに浮き上がる霊夢。

本当に面倒なのはこれから・・・そう霊夢の勘が言っている。

幻想郷は如何なるものも受け入れる。

たとえばそれが脅威であっても・・・

これが全て手料理なのだから驚かされる。

机に並ぶのはケーキからオードブルから・・・

パーティーというよりかは披露級だぞこれ？

「ん・・・美味しい、美味しい・・・泣けてきた」

「泣かないでください・・・そんなに美味しいですか・・・？」

うんうんと頷きながら料理を口に運ぶ。

俺と同じようにお空もお隣も料理を食べている。

さとりはそんな俺を見てクスクスと笑っている。

しかし、そんな中1人姿を見せていないこいし。またどこかへ行ってしまったのだろうか？

「折角のパーティーだというのに・・・少し探してきますね」

さとりは立ち上がり、こいしを探すべく部屋を出る。

パタンとしまる扉の音は何かを遮断するかのような後味の悪い音。

またもや胸騒ぎがする・・・でも、紫がまたあのようなことをするとは思えない。

ただの勘違いだといひ・・・そう願うばかりだった。

「・・・お隣、少し教えてほしいことがある」

誰もいない廊下を淡々と歩く。

あの子は無意識を操るから目を凝らす程度じゃ見つけることが出来ない。

・・・実際はどうやっても見つけれないのだが。

「こいし？折角のパーティーなのだから帰ってきなさい。こいし？」

呼びかけても応答は無い。

それとも、隠れて驚かそうとでもしているのだろうか？

こいしのことだからまた冷やかしても・・・

「（・・・・・・・・誰か来る）」

咄嗟に後ろを振り向けばそこには白髪の少女が睨んでいた。

姉を見るような目じゃない・・・

それは憎しみを存分に含めた瞳。

嫉妬心とはこれほどまでに狂気と化すものなのだろうか。

「お姉ちゃんばかり・・・お姉ちゃんばかり・・・・・・・・」

「何を言ってるの・・・？こいし、こいし？」

俯いたままのこいしに呼びかける。

返事がない、無視をしているのか聞こえていないのか。

ただこれだけは言える。今のこいしは普通じゃない。

同じ空間にいただけで分かる・・・ドス黒いオーラが。

嫉妬から生まれた憎しみ、そして殺意。

「お姉ちゃんばかり・・・！！ずるい、ずるいずるい！！」

たった半日で嫉妬心とはここまで膨大なものになるのだろうか。

それは個人差があるのだろうか、それでもおかし過ぎるほどこいしの嫉妬心は大きい。

「私にも幸せを頂戴・・・お姉ちゃん」

やっぱりそうだったんだ。

最初から何かおかしいと思っていた。

口も顔にも出さなかったが、俺の勘は悪い意味で当たっていた。しかし、それでもやはり引つかかるものがある。

「（こいしちゃん・・・何か憑いていた・・・!!）」

俺には靈感なんてない、ましてや特別な能力すらない。

それでも何故か感じた、悪霊のような気味の悪い感覚。

こいしに纏わりついたあの気持ちの悪い感覚。

そう・・・さとりが危ない。

「（でも・・・俺に何か出来るのか・・・俺に敵対するほどの力があるのかよ・・・）」

人間は愚かだ。

1人じゃ何も出来ない・・・

足手まといになるだけ・・・

でも、それでも俺は走る。ただひたすら走る!!

「さとりさん!!」

長い廊下が更に長く感じる。

感覚とは恐ろしいものだ。

しかし、だらだらと走っている暇はない。

普段から運動をしなかった自分を恨みたい。

「っ・・・・・・・・くそったれッッ!!」

第十一話 「本当の幸せ」

無数に放たれる弾幕。

追い込むかと思えばフェイク。

前から後ろから、上から下から・・・

こいしはあらゆる方向から弾幕を放つ。

「こいし・・・!! やめなさい!!」

さとりが叫ぶもこいしはやめない。

弾幕は次から次へと放たれる。

「あはは!! 楽しいよお姉ちゃん!!」

弾幕の1つがさとの顔を掠める。

一筋の赤い液体がそっと垂れ、さとりは顔をしかめた。

妹の狂気・・・こんなの今までで一度もなかったはず。

姉妹喧嘩は度々するが、こんな喧嘩はしたことがない。

何がこいしを動かしているのか・・・心が読めない。

「それ!!」

高密度の弾幕がさとりを襲う。

避けきれない、そう感じたさとりは避けるのを諦め弾幕に突っ込んだ。

防御姿勢を取っていたおかげでダメージは最小限に抑えれた。

「やめなさい・・・やめて!!」

「・・・やめないよ。お姉ちゃんばかりずるいもの」

こいしの顔が歪む。

狂気に満ちた笑み・・・

それは笑みではないかもしれない・・・

「お姉ちゃんばかり・・・私だって・・・私だって・・・!!」

放たれる弾幕が突如やむ。

下に俯いたままこいしは喋り続ける。

悲しい、か細い、今にも消えてしまいそうな声で。

「私だって幸せになりたい・・・お姉ちゃんみたいに笑っていたい!! 私だって好きな人つくって一緒に笑い合いたい!!」

それは叶わぬ願望かもしれない。

でも、それを叶えた人物がいるから。

目の前に、実の姉が。

「お姉ちゃんばかり良い思いするのなら・・・みんな××ばいい」

「こいし・・・!!」

こいしが言い放った言葉にさとりの形相が歪む。

それはさとり自身に放たれた言葉では無い。

お隣にもお空にも・・・啓祐にだって放たれた言葉。

さとりの堪忍袋がいい加減限界を迎えたらしい。

「いい加減にしないで・・・ふざけるのもいい加減にしろ!!」

「いい加減にするのはお姉ちゃんの方だよ!! 私は何故いつでもこんな目に合わなきゃならないのよ!!」

廊下に響き渡る2人の少女の怒鳴り声。

それは救いを求めた声なのかもしれない。

それは愛する妹を守る為に放たれた声なのかもしれない。

しかし、2人に2人の声は届かない。

手遅れ、共に守るべき線が切れてしまったのかもしれない。

「私だけならまだしも・・・お隣やお空・・・啓祐さんにまで・・・!!」

さとりが一步一步歩みを進める。

ガツガツと、怒りの籠った一歩。

こいしは目頭に涙を溜めながら訴える。

「私は幸せになりたいの!! お姉ちゃんみたいに幸せになりたいだけなの!!」

その言葉はもうさとりには届かない。

生涯唯一愛した彼を侮辱されたさとりにはもう届かない。

確かに理不尽なのかもしれない。

さとりもこいしも辛い思いをしてきた。

人間から嫌われ、妖怪から恐れられ。

そんな中、さとりだけが幸せを手に入れた。

それをこいしは嫉妬した。

当たり前なのかもしれない。それでもこいしは嫉妬した。

もし立場が逆だったら?

さとりは我慢していただろうか?

それともこいしと同じく嫉妬し、今に至っただろうか?

分らない、それでもこれだけは言える。
愛した者を侮辱されて誰が黙っていると思う。

「お、お姉ちゃん・・・やめて・・・やめてやめて!!」

一步一步近づくさとりから逃れようとするこいし。
足がガクガクと震え、涙は容赦なく流れ落ちる。

いつものお姉ちゃんはいない。

そこにいるのは愛する者を侮辱され、我を失ったさとり。

「いや、やだよ・・・・・・やめて!! やめて!!」

さとりの手が伸びる。

こいしの髪を掴むように、引き千切るかのように。

恐怖に怯えるこいしにさきほどまでの勢いはどこにもない。
ただただか弱い少女がそこにいるだけ。

「いや・・・いやああああああ!!」

バシッ!!

鈍い打撃音が響く。

涙をボロボロ零しながら顔を上げるこいし。

さとりの手が目の前まで伸びている。

伸びているが・・・動かない。

そして、さとりの視線はこいしの上をいていた。

「・・・何してる？」

そこには1人の少年がいた。

茶色の混じった黒髪、黒色の瞳をした少年が。
さとのりの頬を思いつき叩いた少年が。

「黙ってないで答えろ。何してた!？」

少年は怒鳴る。

自身の愛する者を目の前にして尚怒鳴る。

「何があつたか知らないけどな・・・何故こんなことをした!？」

さとのりの瞳からも涙が零れ落ちる。

我に返って視界に映ったもの。

泣き崩れる妹と、怒りに満ちた啓祐。

「わ、私・・・・・・・・」

涙が止まらない。

自分が何をしたのか、見れば分かる。

「・・・・・・・・わああああああああ!!」

さとりも泣き崩れる。

泣き崩れる2人の少女に挟まれ立ち尽くす。

騒然としていた地霊殿の廊下に再び静寂が戻る。

二つの泣きじゃくる声を除いて・・・

気持ちがおさまったのか、2人の少女は落ち着いてベッドに座っている。

お互いに視線を合わせ、まるで意思疎通でもしてるかのように頷く。

「・・・ま、大事に至らなくてよかったよ」

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

さとりはひたすら謝り続ける。

そんなさとりを優しく抱きしめる。

隣ではこいしがじっとこちらを見ている。

「・・・こいしちゃんも、おいで」

そう言うとすぐにこちらに近づくこいし。

そして俺の胸目掛けて飛び込む。

さとりとこいし、2人の少女。

互いに辛い経験をし、互いに同じ道を歩んできたのかもしれない。そこで道が分かれ、互いに別々の感情を懷いたのかもしれない。

今回の喧嘩は色んな意味でよかったのかもしれない。

「・・・言いたいこと言えてすっきりしたろ？何か言いたいときは言えばいいんだよ。ま・・・あんな喧嘩は駄目だけどね」

2人を強く抱きしめ呟く。

俺は何がしたいのか・・・自分でもよく分かっていない。

「さ、俺の為のパーティーはどうなったのかな？まさかあれでお開きなんて悲しいことはないよな？」

「それでは・・・啓祐さんの移住祝いです・・・乾杯」

「「乾杯！」」

波乱万丈な初日だったと思う。

そんな中で俺のお祝いパーティーは再び幕開けをした。
相変わらずの豪勢な料理、全部さとりとこいしが作ったらしい。

「・・・やっぱり美味しい」

一日で二回もこれを食べれるのだから俺は幸せ者だ。

ガツガツと料理を頬張る俺の横で2人の少女が何かを話している。

「こいし・・・さっきはごめんなさい」

「ううん・・・私が悪いの。理不尽に怒っちゃってごめんなさい・・・」

俯く妹の頭にポンツと手を置くさとり。

優しくくしゃくしゃと髪を撫でるその姿は優しいお姉ちゃん。

俯いていたこいしの表情が段々明るくなっていく。

「お姉ちゃん・・・」

さとりを抱き着くこいし。

それを優しく受け止めるさとり。

仲直り、しっくりくる言葉だ。

やはり喧嘩はしても姉妹は姉妹。これでこそ本当の姉妹なんだろう。

「（私も自分で幸せ探すから・・・お姉ちゃんは早く結婚して子供作りなよ）」

ぼそっとこいしがさとの耳元で呟く。

それを聞いて顔を真っ赤に染めるさとり。

また始まった、2人の少女による姉妹喧嘩。

あまりに微笑ましくて笑みが零れてしまう。

・・・俺は幸せ者だよ。世界一の幸せ者だ。

「それで、現時点ではどうなのよ？」

「後数日というところかしら。ただし厳戒態勢は引き続き必要ね」

紫が有もしない書類をめくるような仕草をしながら答える。

呆れ顔の霊夢は視線を逸らし、何も無い筈の虚空を見つめる。

八卦路の調子確かめる魔理沙は軽くマスターズパークを放つ。

「相手が誰だろうとぶっ放すぜ」

「それは頼もしいですわ。私の出番が不必要なくらいに」

「あんたはここにいなさい。まったく、誰が起るかもわからない異変の為に上空で待機してると思ってるのよ」

2人の少女と1人の女性は幻想郷上空でふわふわと浮いている。それはただの雑談かもしれない、しかし、そうでもないらしい。紫があれほどまでに真剣な眼差しで話したのだから。

”幻想郷に新たな脅威が現れる。それは過去最大の脅威かもしれない”と。

「・・・悪いわね霊夢、それに魔理沙」

申し訳なさそうに呟く紫。

それを聞いて2人の少女はため息をつく。

「困ったときはお互い様よ」

「お互い様だぜ」

彼女達は幻想郷では数少ない人間の能力者。代々受け継がれる博麗の力、努力の結晶が詰まった魔法使い。

「ふふ・・・本当に頼もしいわ」

幻想郷も捨てたものじゃない。

そう、そんな幻想郷を守るのだから。

「（・・・守り切って見せますもの。私の愛する幻想郷なのですから）」

第十二話 「漆黒の襲撃者、それぞれの思い」 (前書き)

話が急展開します。

果たして、それぞれの運命はどうなるのか・・・

第十二話 「漆黒の襲撃者、それぞれの思い」

光が差し込まぬとも朝を迎えれば自然に目が覚める。

ふかふかとしたベッドが見た目以上に気持ち良く、このままずっと寝ていたいとまで思ってしまう。

さらにその欲望に追い打ちをかける事がある。

左右から漂う甘い香り。

今の俺を見れば誰もが妬み、そしてふるぼっこにされるだろう。

「（……………本当の幸せとはこういうものなのか……………）」

左右から聞こえる吐息に我慢しつつ俺はむくつと起き上がる。

お燐とお空は地霊殿にある温泉の管理を任されているらしい。

地下から湧く温泉が地下で入ることが出来る。

地上で入るよりも数倍も数十倍も気持ちいいのだろうな…………

「……………にやむ……………啓祐、さん……………」

寝ぼけながら俺のお腹周りに腕を回すさとり。

わざとやってるのかと思わせるぐらいに正確に腕が回り込む。
起きようと思ったのだが…………生憎ベッドへ逆戻りらしい。

「はぁ……………もう一眠りす——」

ゆっくりと寝転がるつもりが勢いをつけてしまったらしい。

いや、正確に言えば勝手に勢いがついた。

そう、まるで誰かに引っ張られるように…………

「てことでお兄さんはまだ寝るよね？私、一緒に寝たいな」

銀髪の少女こと古明地こいし。

お腹周りはさとりを抱きしめられ、腕はこいしに抱きしめられる。普通ならこんなシチュエーション皆が喜び発狂するだろう。

ただし、実際に直面する者は一概にそうではないこともある。

修羅場・・・もしさとりが目を覚ましたらどうなるだろうか？

その答えはすぐに導き出される。

もつとも、実体験を踏まえての答えだが・・・

「・・・・・・・・こいし!!」

「へえ、さとり様がそんなことをするなんてねえ・・・」

地霊殿温泉管理地、名を間欠泉地下センターというらしい。

湯の温度の調整、温泉そのものの調整などを行う場所だ。

俺は今お隣に温泉の調整の仕方を教えてもらっている。

ただで住むのも図々しいと感じた俺が自ら言い出したことなのだが。

「怒ったかと思えば泣き出しちゃってさ・・・慰めるの大変だったよ・・・」

さとりが目を覚ませばこいしが俺の腕に抱きついていて。

わなわなと体を震わせ、またもや姉妹喧嘩が勃発するのかと思いきや涙をぼろぼろと零し始めた。

流石のこいしも俺からさっと離れ姿を消した。

残った俺は泣き続けるさとりを慰め続けた。

「・・・さとり様も変わったね。涙なんて流すような人じゃなかったのにさ」

「俺もそう思う・・・初めて会った時はこう、なんというか・・・人と関わることを極端に嫌っているような感じだったからさ」

お空が何かを放り込むのを背に俺は呟く。

初めて出会った時のさとりはどこか不思議だった。

けれど、今はこれぽっちもそうは思わない。

さとりと出会えてよかったと。

こうしてお隣やお空、こいしにも出会えた。

自らの故郷を捨てるのにはやはり抵抗があったが、それでもこれでよかったと思う。

「さとり様は幸せだと思うよ。あんたみたいなお人好しで優しい人と結ばれたのだからさ」

そう言われると照れくさくなってしまう。

俺は自分自身をお人好し、優しいなんて思わない。

どちらかと言えば人と関わるのがあまり得意ではない。

仲良くしてくれる人達には心から感謝しているが・・・

「ま、さとり様を理不尽に泣かせたりしたらあたいが許さないよ。それだけは胸に刻んでおくといいさ」

お隣からキツイ一言を頂き苦笑いする。

いや、大丈夫だ。

俺は永遠に傍にいと誓ったのだから。

場所は幻想郷上空。

渦巻く雲が緊迫する空気に更なる追い打ちをかける。

そこに3人はいた。

払い棒を片手にお札を構える巫女。

八卦路を構え、いつでも戦闘可能な状態を保つ魔法使い。

日傘に隠した表情から愉快さが見え隠れするスキマ妖怪。

「いかにも来るって感じね・・・嫌ねこういうの」

「びびってるのか霊夢？相手が誰であろうとパワーで押し切るだけだぜ」

味方同士で火花をバチバチと散らす2人。

そんな2人を後ろからじっと見つめる紫。

「（・・・後、7秒）」

眼差しが鋭く、真剣な表情へと変化を遂げる。

何かを感じ取ったのか、霊夢と魔理沙も眼差しが真剣なものへと変わる。

「構えなさい。始まるわ・・・覚悟してなさい！！」

声を荒げる紫。

誰も彼女のこんな姿を見たことは無い。

日傘を閉じ、その眼差しから嘘は見えない。

ただひたすら虚空を睨みつけるその眼差しに映るものはただ一つ。

「出た場所にはお出迎えってかぁ！？生憎んなもの頼んだ覚えはねえぞおらぁ！！」

男は叫び、虚空から生み出した漆黒の刀を振り下ろす。

予め構えていた3人には、それを避けるには申し分のないくらい余裕があった。

「折角のお出迎えなんだからよぉ！！ちとは楽しませてくれよなぁ！？」

漆黒の刀は両手に握られる。

二本の刃が交互に振り下ろされる。

狙いは魔理沙らしい、理由は分からない。

「おらおら！！逃げてばかりじゃつまんねえぞおい！！」

「誰が逃げてばかりだって？油断のしすぎだぜ！！恋符「マスタースパーク」！！」

構える八卦路から超極太のレーザーが射出される。

それは射程圏内の敵を全て葬り去る最強のレーザー。

全出力を出せば男1人など木端微塵に・・・

「ならねえんだよなぁ！！甘いわ糞魔法使いが！！」

不意に魔理沙の背に現れ、漆黒の刀を振りかざす。

反応の遅れた魔理沙に避ける余地は残されていない・・・！！

男は躊躇なく刀を振り下ろす。

体を裂き、赤い鮮血が飛び散る・・・筈だった。
男の振り下ろした刀は何もない虚空を空振りしただけだった。

「・・・油断していたのはあなたの方でして？」

「ちいつ・・・手間かけさせたな」

悔しそうに歯を食いしぼる魔理沙。

境界の力を利用し、男の刀が当たる寸前に魔理沙をスキマへ落としたのだ。

まさに間一髪・・・

「氣を引き締めなさい。生温い考えは・・・死への近道になるわよ」

「今日も管理終わり！お隣！帰ろう？」

第三の足と称した右腕をパタパタを振り回す空。

それを見て静止させるべく空の下へ急ぐ隣。

あれは容易く振り回すような物じゃないぞと言わんばかりに・・・

「・・・それでさ、さっきから何を見てるのかな？」

隣がそう言い放つと物陰から1人の少女が現れる。

赤い髪に真紅の瞳、見た目はまだ幼い少女。

「怨霊が少し騒がしいと思えば・・・何者だい？」

「・・・氷華。私はそう名付けてもらった」

以外にもあっさりと名乗る少女、氷華。

しかし、あっさり過ぎるのは名乗るだけではなかった。

「間欠泉地下センター・・・核の力、貰いにきました」

何やら胸騒ぎがする。

地上にも、そして地霊にも。

一刻を争うかもしれない・・・

「・・・さとりさん？」

「あ、は、はい・・・何でしょう・・・」

不意に名前を呼ばれて驚いてしまう。

無理も無い、こんな胸騒ぎは初めてなのだから。

「・・・ちょっと失礼」

ピタッとおでことおでこが引っ付きあう。

ただ熱があるかないかを確かめているだけなのだろうけど・・・
心臓が一気に高鳴ってしまうのは自然の摂理だ。

「熱はないみたいだけど・・・大丈夫？少し寝る？」

「いや・・・大丈夫です。・・・その・・・心配してくれて・・・
ありがとうございます・・・」

ぎゅっと抱き合う。

ほんわかとした温もりと、柔らかな体の感触が服越しに伝わってくる。

そして、さとりだけでなく俺までもが胸騒ぎを起こした。

「・・・普通では、ないな」

抱き合うのをやめ、背を向けていた扉の方を見据える。
何かが起こり始めている・・・いや、既に起こっている。

「啓祐さん・・・」

「とりあえず見に行こう。お空とお隣が心配だ」

扉を開き、俺とさとりは走り出す。

これが残酷な未来へのカウントダウンということも知らずに。
ただ、未来は自らが切り開くもの。

出合いがたくさんあるように、未来だってたくさん存在する。

突然の襲撃者。

幻想郷を守るべく立ち上がる巫女と魔法使いとスキマ妖怪。
間欠泉地下センターに現る敵。

応戦する空と燐。

胸騒ぎを抱えながら駆けつける少年少女。
姿を晦ましつつ、何かの機会を伺う少女。

1人1人の思想、考えは違うかもしれない。

ただ、その先にあるのは守るという思い。

それぞれが立ち上がり、そして迎え撃つ。

幻想郷での新たな異変が今始まった――

第十四話 「死と絶望へのカウントダウン」 (前書き)

オリ主の無双・・・も一瞬かもしれない。

そろそろ話が動き出します。

第二章の中核に突入です。

第十四話 「死と絶望へのカウントダウン」

「っ……ちょこまか逃げるわね……」

「逃げ足だけが俺の取り柄なんでね。それは俺への褒め言葉かあ！？」

目に見えぬ物凄い速度で二本の刀を振り回す男。

それをギリギリのところかわし、隙をみて弾幕を放つの繰り返しだ。

「それで、蚊帳の外のアんたらは油断てかあ！？」

霊夢をその場に残し魔理沙と紫の下へ移動する男。

移動と称してるが、その速度は瞬間移動にも劣らないほどだ。

まるで気を逸らしているかのように見える2人の下へ移動し――

「あの世で恨むんだな、あの世でなあ！！」

目を逸らしている2人に向かって刀を振り下ろす。

そこには無残な光景が広がる筈だった。

そう、2人は気を逸らしているかのよう”見せていただけ”

男の短気な性格を利用した初歩的かつ単純な罠。

対峙して1時間すら経っていない、それなのに男の性格を見切ったその洞察力。

八雲紫、彼女の頭脳に勝る者はいないのかもしれない。

「己の性格に後悔しなさい。そう、あの世でね！！」

「今度はこっちの番だぜ!! さっきの仕返しだ!!」

魔理沙が箒の上に立ち、紫は一枚のカードを握る。
同時に叫ぶそれはスペルオン。

「魍魎「二重黒死蝶」!!」

「彗星「ブレイジングスター」!!」

紫からは高密度かつ二重、赤い蝶弾と青の蝶弾が撃ち込まれる。
容易に避けることの出来ないそれは死への誘い。

魔理沙は彗星の如く箒に乗って突撃する。

当たれば無傷では済まない。

致死性が無いスペルとはいえ、二つが同時に当たれば無傷では済まない。

更に後ろには博麗の巫女が構えているのだから。

「.....くぎぎぎぎ」

不気味なその声は紛れもない、目の前の男から発された声。

攻撃する2人の手を煩わせたが、止めることはなく攻撃を続ける。

それが畏だと知らずに。

「きはああああ!! 馬鹿だなあお前ら... てめえらよりも場数踏んでるんだよこっちはなあ!!」

刀を交差させて構える。

それはくるもの全てを拒絶するかのような構え。

直後、漆黒の刃が赤く光りだす。

「...黒死「赤光拒絶」」

二重黒死蝶を跳ね除け、ブレイジングスターをいとも簡単に吹き飛ばす。

赤光拒絶・・・全てを拒絶する赤き閃光といったところか。
しかし、彼女らが驚いたのはそこではない。

「スペルカード・・・ですって・・・」

スペルカードは博麗の巫女こと博麗霊夢が提唱した戦いの方法。
人間と妖怪が対等に戦うための一つの戦法。

そのスペルカードを外来人が使用する。

そう、この男は外来人ではない。

だとすれば元幻想郷の住人だというのか？

「わりいが・・・お前らにはここで死んでもらう。俺には成し遂げなければならぬことがあってな。邪魔されるわけにはいかねえんだよ！！！」

「さとりさん！！お隣とお空は間欠泉地下センターだ！！！」

「間欠泉・・・まさか・・・」

さとの不安は的中したらしい。

走る速度は更に増していく。

一刻を争う事態になっているらしい。

「啓祐さん!! 私には先に行きます。そして・・・無茶だけはしないでください!!」

そう言ってさとりは俺をおいて先に進む。

その場に残された俺は立ち尽くすだけだった。

・・・確かに、人間の俺が妖怪や能力者同士の戦いで役に立つだろうか。

役立つわけがない。むしろ足を引っ張るだけだ。

「・・・だからって」

この場で留まってもいいのか？

さとりさんが戦うかもしれないのに。

俺は傍観者となってもいいのか？

「・・・嫌だ」

さとりさんを守ると誓ったんだ。

お隣にだって言われた、泣かせたら承知しないと。

俺は傍観者では駄目なんだ。

「・・・くそつたれ」

止まっていた足を動かし始める。

先ほどまでとは比べ物にならない速度で。

俺は間欠泉地下センターへ走る、とにかく走る。

何が起きているのか分からない。

俺の想像など容易く超えてしまう事態なのかもしれない。

「（急げ・・・急げ・・・!!）」

それでも俺は走る。

縛れる足を必死に動かす。

さとり達のいる間欠泉地下センターへと。

「うにゅ？カードが使えない・・・」

お空の発動した・・・と思ったスペル。

発動は空振りに終わり、そこにあるのはただの一枚のカードだけだった。

「スペルカードというものは無効にしました。あなた達はそれがなければ戦えないのでしょうか？」

「あたい達はスペルだけで戦ってきたわけじゃないよ！！」

氷華の後方から弾幕を撃ち込む隣。

凄まじい数の弾幕は咄嗟で避けれるものではなかったのだが・・・

「・・・こんなもの・・・甘い」

スウーーーーと消えるその姿はまるでスキマを掻い潜ったかのよう。

2人が氷華の姿を探す中、それは突如として上空から舞い降りる。

そして奇襲の如く機関銃を両手に構え・・・

「DEAD ENDです。あなた達の死体はきちんと埋葬してあげ

ますよ」

機関銃から容赦なく弾丸が撃ち込まれる。
当たれば待ち受けるは死のみ。

機関銃の音に気付いたのは既に時遅し。
上空を向けば降りかかるは弾丸の雨。

「お空！！お憐！！」

その声に反応したのが吉だったのか。

声の主の方へ咄嗟に横っ飛びをする空と憐。
ダダダダンとその場に無数の弾丸が撃ち込まれる。

「・・・あなたですか。ここへ侵入したのは」

「・・・悟りの妖怪・・・思ったよりも早く来たのは少し想定外」

構える機関銃を降ろし、少しの休戦を表す氷華。

さとりは目を閉じ、何かを悟るかのように集中力を高める。

「・・・！？みんな後ろに下がって！！」

分けも分からずに後ろへ下がる空と憐。

さとりは驚いたような表情で氷華を見据える。

直後、さとり達のいた地面から無数の槍が飛び出した。

「・・・心を、読まれましたか」

機関銃を捨て、今度は何かの結界を張る氷華。

その結界の一部、自身の心臓あたりだけを切り開く。

「言わば硝煙反応を防ぐような感じなんですけどね。実際はそんなことはどうでもいいのです」

切り開いた結界に大きめのマシンガンをねじ込む。

その銃口が睨みつけるのはさとり達。

そう、次は逃がさないと言わんばかりに。

「心を読んでも無駄です。私が、何の策も無しに敵地に飛び込むとでも思いましたか？」

「・・・右、上と下・・・左！？全方向ですって!？」

先読みしてそれは無駄。

氷華が言いたかったのはそういうことだろう。

全方向から、更に隙間の無い攻撃。

誰がどうやってこれを避けるというのか。

「私と主人・・・成し遂げなければならぬ思いがあるのです。邪魔する者は、容赦なく死へと葬ります」

さとり達のいるその場を囲むように槍が出現する。

しかし、それらが直接攻撃することはない。

彼女が、氷華が結界に捻じ込み向ける銃口が悲鳴を上げようとしている。

「私は負けない。たとえ何があろうと跪くわけにはいかない!!」

引き金に指をかけ、それを自分の方へと引く。

そうすれば弾丸が撃ち込まれ、さとり達は容赦なくあの世行きとな

る。

絶体絶命、しかし、そんな言葉は存在しなかった。

ドンッッ！！

弾丸の射出される音。

それが響き、さとり達は槍に囲まれながら最期を迎える・・・ことはなかった。

マシンガンは力なく地上へ落下する。

氷華の後ろ、そこには1人の人間がいた。

まだ幻想郷に来て間もない、惨めで力のないちっぽけな人間が。

「ふざけるなふざけるなふざけるな！！死に葬り去る？ふざけんじやねえよ！！」

己の拳に力を籠め、まだ幼い少女を容赦なく殴る。

年齢なんて関係ない、愛する者を守る為なら相手が誰だろうと容赦しない。

拳に血が滲もうとも、少女が拳銃を盾にしようと。

その拳は止まることを知らない。

「（何、何この人間！？知らない・・・こんなの私の想定外・・・！！）」

殴られながらも分析を続ける。

ただの人間が、人間風情がどうして私に攻撃できるのか。

いや、そもそもどうやって結界を掻い潜ったのか。

この結界が人間如きに破られる筈がない。

ズゴンッッ！！

その一撃は無残にも顔面にめり込んだ。
少女は力なく落下する。

そして、人間の乗っていた何かも崩れ落ちる。

「啓祐さん!!」

落下する啓祐を咄嗟に受け止めるさとり。

ぐったりと横たわる少女は空と燐が押さええている。

「・・・さとりさん。無事でよかった」

「何で・・・何で無茶するのですか!! 私は無茶しないでと言った筈です!!」

涙ぐむさとりを横目にすっと立ち上がる啓祐。

その瞳には倒れる少女でも、地霊殿でもなかった。

何故か地上を見据えている。

そう、まるで地上で何が起こっているのか分かっているように。

「さとりさん」

啓祐は小さく呟く。

自分に何が出来るのか、分からない。

自分に何かがあるのか、分からない。

それでも悩む自分に終止符を打つ。

そして、自ら絶望の淵へと足を踏み入れる。

「地上へ・・・連れて行ってください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1976ba/>

光射す方へ・・・【東方小説】

2012年1月8日16時45分発行